埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第312集

比企郡吉見町

西吉見条里遺跡

市野川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

２００５

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

西吉見条里遺跡遠景

西吉見条里遺跡調査区全景

序

埼玉県は、厳しい社会情勢の下、「環境」を大切にし、県民生活に「安心」を届け、埼玉の「元気」を高めることを目指し、また県民の目線に立った県民のための県政を推進しております。

県土整備部では、誰もが豊かさを実感できる県土を築くため、「安心・安全の県土づくり」、「個性と魅力ある県土づくり」、「環境豊かな県土づくり」を目標に、河川についても時間雨量50㎜程度の降雨に対応した治水施設の整備対策を推進しています。

吉見町の市野川河川改修事業は、水害の少ない、安全で住みよいまちづくりと自然との共存を目指し、自然環境に配慮した河川の改修を行い、安心して生活できる県土づくりを実現するものです。

埼玉県のほぼ中央に位置する吉見町は、町の東西を荒川と市野川が流れ、ほとんどが平野部で西部には丘陵が広がる、美しい自然に恵まれた町です。この丘陵一帯には、国指定史跡の吉見百穴や黒岩横穴墓群など多くの遺跡があることが明らかになっていましたが、近年、市野川左岸の低地部にも三ノ耕地遺跡、西吉見古代道路等多くの遺跡があることが判ってきました。

この河川改修事業の事業地内には、西吉見条里遺跡の存在が確認されており、その取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、関係諸機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課の調整により、当事業団が埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受けて実施いたしました。

今回の発掘調査では、平安時代の溝跡や畦畔状の遺構、河川跡と堤状の土盛跡などが発見され、当時の人々のくらしを知る貴重な資料を得ることができました。

本書はこれら発掘調査の成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また普及・啓発の資料として広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県県土整備部河川砂防課、東松山県土整備事務所、吉見町教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成17年10月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　福　田　陽　充

例　言

1．本書は、埼玉県比企郡吉見町の所在する西吉見条里遺跡の発掘調査報告書である。
2．遺跡の略号と代表番地、および発掘届けに対する指示通知は、以下の通りである。
西吉見条里遺跡（略号NSYSM）
埼玉県比企郡吉見町大字南吉見190-1他
平成16年８月２日付け　　教文第２-29号
3．発掘調査は、市野川河川改修事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。
5．発掘調査は、劔持和夫、西井幸雄、吉田稔、栗岡潤が担当し、平成16年７月１日から12月22日まで実施した。
6．整理・報告書作成作業は、平成17年６月10日から10月20日まで実施した。
7．遺跡の基準点測量は、（株）東京航業研究所に委託した。
8．発掘調査における写真撮影は劔持、西井、吉田、栗岡が、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
9．出土遺物の整理および図版の作成は、礒﨑一、西井が行った。
10．本書の執筆は礒﨑が行い、Ⅰ-１を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が行った。
11．本書の編集は、礒﨑が担当した。
12．本書にかかる資料は、平成17年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13．本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝を表します。（敬称略）
吉見町教育委員会
太田賢一・弓　明義

凡　例

1．本書挿図中におけるＸ・Ｙの座標数値は、世界測地系（GRS80）に基づいた平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。
2．遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準直角座標に基づいて設定しており、10ｍ×10ｍの方眼である。
3．グリッドの名称は、北西杭を基準として東西方向西から東へＡ～、南北方向北から南へ１～と番号を付けている。
4．挿図の縮尺は、各図版中に指示した。
遺構図　　1/60、1/30
遺物　　須恵器･土師器　1/4
　　近世遺物　1/4
5．遺構の表記記号は、以下のとおりである。
ＳＫ･･･土壙
ＳＥ･･･井戸跡
ＳＤ･･･溝跡
6．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高で、単位はｍである。
7．本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000、吉見町発行の1/2500を用いた。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
Ⅲ　遺跡の概要 …… 11
Ⅳ　遺構と遺物 …… 14
　1．井戸跡 …… 14
　2．土壙 …… 14
　3．溝跡 …… 15
　4．堤状盛土遺構 …… 22
　5．柵列状遺構 …… 22
　6．ピット群 …… 22
　7．谷地形 …… 22
　8．土器集中地点 …… 22
　9．グリッド出土遺物 …… 28
　10．D区の遺構 …… 30
Ⅴ　結語 …… 31

挿　図　目　次

第1図　埼玉県の地形図 …… 5
第2図　周辺の遺跡 …… 6
第3図　遺跡周辺の地形図 …… 8
第4図　調査区全体図 …… 11
第5図　B・C区遺構配置図 …… 12
第6図　D区遺構配置図 …… 13
第7図　第1・2号井戸跡　第1～4号土壙 … 14
第8図　第1号溝跡 …… 15
第9図　第3号溝跡 …… 16
第10図　第2・7～10号溝跡 …… 17
第11図　第4・5号溝跡 …… 18
第12図　第3～5号溝跡　ピット出土遺物 …… 19
第13図　堤状盛土遺構 …… 20
第14図　堤状盛土遺構断面図 …… 21
第15図　杭列状遺構 …… 23
第16図　土器集中地点1 …… 24
第17図　土器集中地点1出土遺物 …… 24
第18図　ピット群　土器集中地点2遺物出土状態 … 25
第19図　土器集中地点3出土遺物分布図 …… 26
第20図　土器集中地点3出土遺物 …… 27
第21図　グリッド出土遺物（1） …… 28
第22図　グリッド出土遺物（2） …… 29
第23図　D区断面図 …… 30

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 7
第２表　溝跡、ピット出土遺物観察表 …… 19
第３表　土器集中地点１、２出土遺物観察表…… 24
第４表　土器集中地点３出土遺物観察表 …… 27
第５表　グリッド出土遺物(1) 観察表 …… 28
第６表　グリッド出土遺物(2) 観察表 …… 29
第７表　Ｄ区遺構一覧表 …… 30

写真図版目次

口絵　西吉見条里遺跡遠景
西吉見条里遺跡調査区全景
図版１　Ｂ区全景（西から）
Ｃ区全景（南から）
図版２　Ｄ区全景（南東から）
Ｄ区南端部全景（北西から）
図版３　土器集中地点１遺物出土状態
土器集中地点２遺物出土状態
図版４　土器集中地点３遺物出土状態
土器集中地点２全景
図版５　第３号溝跡出土小碗（第12図１）
第３号溝跡出土小碗（第12図２）
第４号溝跡出土土器（第12図４）
第４号溝跡出土土器（第12図５）
土器集中地点１出土土器（第17図３）
土器集中地点３出土土器（第20図３）
図版６　土器集中地点３出土土器（第20図４）
土器集中地点３出土土器（第20図５）
グリッド出土土器（第21図７）
グリッド出土土器（第21図９）
グリッド出土土器（第22図５）
グリッド出土土器（第22図９）
図版７　墨書土器（第22図４（右），８（左））
土器集中地点、グリッド出土須恵器蓋、
坏、長頸瓶
図版８　須恵器坏底部
土器集中地点３、グリッド出土甕形土器
図版９　土器集中地点３出土「コ」字状口縁甕形土器
土器集中地点、グリッド出土遺物

Ⅰ　調査に至る経過

1．調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国５か年計画21』における基本目標「災害に強い県土をつくる」の施策の一つ「氾濫を防ぐ治水対策の推進」として、河道改修や調節池の整備などを推進してきた。市野川河川改修事業は、こうした施策の一環として、計画されたものである。

このような施策の推進に伴う文化財の保護について、県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、関係部局との事前協議を重ね、調整を図っている。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成15年９月３日付河砂第2206号で県土整備部河川砂防課から文化財保護課長あてに照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成15年11月18日付け教文第2944号で、南吉見条里遺跡（吉見町№47遺跡）の取扱いについて次のように回答した。

１　埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称（№）	種別	時代	所在地
南吉見条里遺跡（№38－047）	集落跡・条里跡	縄文・古墳・平安	吉見町大字南吉見地内

２　取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第94条の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、東松山県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は平成16年８月２日から平成16年10月29日まで実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成16年７月16日付け東整第653号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は、平成16年８月２日付け教文第３－322号で行った。

また、文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成16年８月２日付け　　教文第２－29号

なお、南吉見条里遺跡は平成16年７月９日付け吉教発第1217号により、西吉見条里遺跡に名称変更が行われた。そのため、発掘調査及び報告書作成にあたっては西吉見条里遺跡の名称を使用した。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

２．発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

発掘調査は平成16年８月２日から平成16年10月29日まで実施した。調査面積は5.200㎡であった。

平成16年７月月から事務手続きなど発掘調査の準備を行い、ユニットハウス等の設置及び動力工事、機材運搬等を行った。これと平行して７月26日より、重機による表土掘削を開始した。

調査区は、便宜的に北側から用水までをＡ区、用水から電柱までをＢ区、電柱から発掘事務所用地までをＣ区、発掘事務所の南側をＤ区とした。

表土掘削はＢ区北側から南側に向かって、Ｃ区まで行った。

Ａ区は事前調査が行われていないが、遺跡の範囲内にあるため、重機による遺構確認の確認を行った。その結果、市野川旧河道内にあたることが明らかとなり調査を終了した。

Ｄ区は条里制遺構の確認調査を主目的とするため重機によるトレンチ調査を実施した。トレンチは遺構が想定される範囲に限り調査区に沿って重機のバケット幅で２本設定した。

表土除去作業に併行して８月４日から調査補助員を導入し、遺構確認作業を行った。調査はＢ区から実施した。遺構確認後各遺構の精査に入った。調査区の北側は旧河道部分にあたり、一部範囲を河床面まで人力による掘削を行った。また、これと併行して南北方向に堤防状の高まりが検出されたため、トレンチを設定して土層堆積状況を把握した。遺構精査後、写真撮影及び平面図作成作業に順次移行した。

９月よりＣ区の遺構確認調査に入り順次遺構精査に移行した。

10月に空中写真を撮影し、調査を終了した。

（２）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成17年６月10日から平成17年10月20日まで実施した。

６月10日から遺物の水洗・注記を開始し、続けて遺物の接合・復元作業を実施した。復元が終了したものから実測作業に入り、７月から併行してトレース・拓本を行った。

遺構の第２原図は、６月中旬から開始した。第２原図はスキャナーでパソコンに取り込み、「イラストレーター」でデジタルトレースを行い、遺構図版として保存した。

遺物図版は、トレースと拓本を組み合わせて版組みを行い、スキャナーでパソコンに取り込み、「イラストレーター」で各記号及びスケールの貼りこみを行った。

７月中旬から原稿執筆を開始し、割付作業を行った。７月下旬に原稿執筆を終了した。印刷業者選定後、10月中旬に本書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（1）発掘調査

平成16年度

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村英樹
管理部	
副部長	村田健二
主席	田中由夫
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	宮崎朝雄
副部長	坂野和信
主席調査員	劔持和夫
（調査第二担当）	
統括調査員	西井幸雄
統括調査員	吉田　稔
主任調査員	栗岡　潤

（2）整理事業

平成17年度

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	保永清光
管理部	
副部長	村田健二
主席	高橋義和
主席	宮井英一
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池　久
主事	海老名　健
調査部	
調査部長	今泉泰之
副部長	坂野和信
主席調査員	礒崎　一
（資料整理第一担当）	

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

西吉見条里遺跡は、埼玉県比企郡吉見町大字南吉見190－１ほかに所在する。

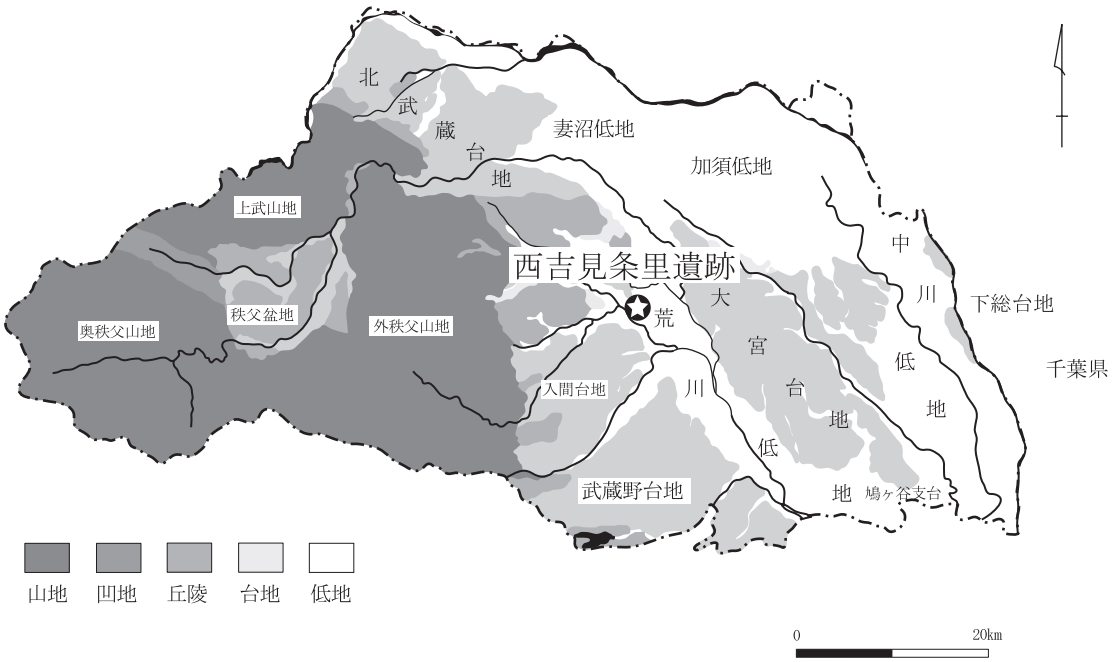
遺跡は、吉見町の南西部、ＪＲ高崎線鴻巣駅から西に約８㎞、また東武東上線東松山駅から東に約２㎞に位置し、市野川と吉見丘陵に挟まれた市野川左岸の沖積低地に立地している。遺跡の標高は15ｍ前後である。市野川を挟んだ対岸は、東松山市の松山台地が広がっている。

遺跡の所在する吉見町は、埼玉県のほぼ中央部に位置し、南部は川島町、西部は東松山市、東部は鴻巣市と北本市、北部は吹上町と大里町に接する東西約７㎞、南北約８㎞で、総面積38.63㎢である。

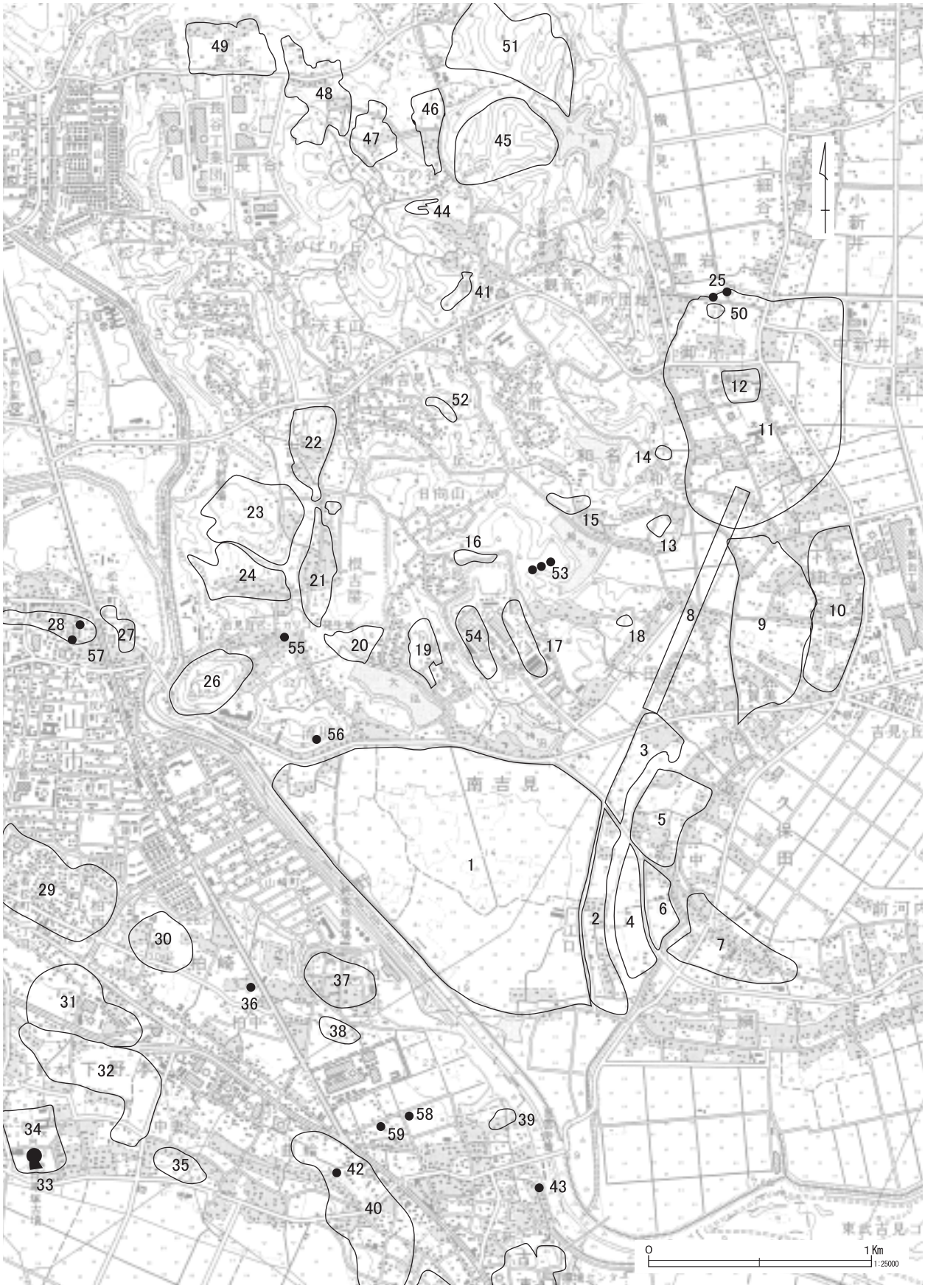
西部の丘陵部と広く開けた平野部からなり町のほとんどを占める平野部は、古来「比企の穀倉」と呼ばれた豊かな田園風景が広がっている。近年ではイチゴの生産が、県内でも有数の生産量を誇っている。吉見丘陵は、標高50～60ｍと低く、比企丘陵と共に新第３紀中新統（凝灰岩、泥岩など）からなり、斜面上は関東ローム層に覆われる。

丘陵東側は、支脈の基部や大小の浸食谷に多くの溜池が存在し、丘陵の西側は滑川、市野川が南流し、吉見丘陵の先端部付近で市野川と合流し、やがて荒川に合流する。和田吉野川と市野川に挟まれて不断の洪水に晒された地域である（大矢雅彦他1996、貝塚爽平他2000、金井塚1978）。

荒川については、中世段階で、吹上から南下して吉見方面へ向かっていたと考えられている。「吉見町中曽根から上砂、本沢、小新井、中新井、今泉には激しく蛇行する旧河道が認められ、同町下銀谷～大和田～古名を経て荒川堤外地へ連続する。この旧河道のさらに西側には大里村小八林から吉見町松崎～御所～久保田～江綱～大串をへて川島町へつづく大規模な自然堤防が認められ」、この自然堤防は幅500ｍ、蛇行波頂は市野川を挟んだ区間で４㎞に達する大規模なもので、現荒川を上回る流量の河川が



第１図　埼玉県の地形図



第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝1／25,000）

第１表　周辺の遺跡

1	西吉見条里遺跡	16	日向山遺跡	31	山王裏遺跡	46	五ノ谷遺跡
2	江口遺跡	17	久米田遺跡	32	上川入遺跡	47	四ノ谷遺跡
3	三ノ耕地遺跡	18	山の根古墳	33	野本将軍塚古墳	48	三ノ谷遺跡
4	西間ノ田遺跡	19	大行山遺跡	34	野本氏館跡	49	ニノ谷遺跡
5	北間ノ田遺跡	20	庚申塚遺跡	35	祇園在家遺跡	50	稲荷前遺跡
6	南間ノ田遺跡	21	十耕地遺跡	36	稲荷塚古墳	51	黒岩横穴群
7	志久遺跡	22	二十二耕地遺跡	37	仲城遺跡	52	十三塚
8	東田遺跡	23	十五耕地遺跡	38	柏崎古墳群	53	三塚古墳群
9	原遺跡	24	七耕地遺跡	39	鷲神杜裏遺跡	54	久米田古墳群
10	下遺跡	25	御所古墳群	40	古吉海道遺跡	55	稲荷塚
11	御所遺跡	26	松山城址	41	四十一耕地遺跡	56	羽黒山古墳
12	源範頼館跡	27	観音寺遺跡	42	野本７号墳	57	下松古墳群
13	和名遺跡	28	上松本遺跡	43	かんべ塚	58	古凍柏崎古墳群
14	丸山遺跡	29	五領遺跡	44	三十七耕地遺跡	59	おくま山古墳
15	和名埴輪窯跡群	30	見入遺跡（鷲大神杜遺跡）	45	茶臼山古墳群		

形成したと考えられている（大矢1996）。

また吉見町教育委員会による調査で、本遺跡周辺の微地形と土地利用について、以下のように明らかにされている（太田賢一2002）。

①遺跡西側の丘陵下には、河川に削り残された形の自然堤防があり、古墳時代前期・後期・平安時代には集落が営まれている（西吉見条里Ⅰ）。

②遺跡西側は、三ノ耕地遺跡から連続する和田吉野川起源の自然堤防が広く確認され、縄文晩期では水場隣接地、奈良平安時代では条里水田域や集落域として利用されている。

③中央から南にかけては、泥炭の発達した低湿地が展開しており、古墳時代前期以降は水田として積極的に利用されていた。（西吉見条里Ⅱ）

④遺跡の西側から南側にかけては自然堤防が存在しているが積極的な利用は認める事は出来ず、層位的には中世初頭頃に形成された自然堤防と理解される。

というものである。

以上によれば、今回調査で検出された古墳時代～奈良平安時代には、遺跡は自然堤防上に展開する集落と広範な沖積地上の生産域として把握することができる。

２　歴史的環境

吉見町では現在のところ旧石器時代の遺物は発見されていない。比企地方で確認された遺跡は、６遺跡あり、28点の石器が出土した（比企地区文化財担当者研究協議会他1994）。

東松山市上川入遺跡でナイフ形石器が出土している（西井1997）。

縄文時代の遺跡は、田甲原遺跡（中期～後期）、久米田遺跡（早期～後期）、万神遺跡等で少量の縄文土器が採集されていた（金井塚1978）が、近年の吉見町教育委員会による調査で、縄文時代の様相が次第に明らかになってきた。

田甲原古墳群内では早期の遺物が、西吉見条里Ⅱ遺跡で前期の遺構・遺物が検出されている（太田2003）。

大行山遺跡（早期～中期）の調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡が４軒調査され（弓1995）、周辺では東松山市山王裏遺跡、前山遺跡等がある。

後期の調査例としては、西吉見条里遺跡、倉敷遺跡、御所遺跡があり、二十二耕地遺跡（弓2002）で

第３図　遺跡周辺の地形図

は竪穴住居跡が10軒調査された。

三ノ耕地遺跡では、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡が５軒、竪穴状遺構３軒、水場遺構１基が調査されている（太田1998）。

弥生時代は、大行山遺跡で弥生中期の竪穴住居跡12軒と、方形周溝墓１基が調査された（弓1995）。三ノ耕地遺跡でも遺物の出土があった（太田2003）。周辺では東松山市天神原遺跡、代正寺遺跡、大里町船木遺跡、円山遺跡、下田町遺跡（赤熊2004、2005）で中期の遺構、遺物が出土している。

後期の遺跡としては、八耕地遺跡、久米田遺跡が調査が実施されている（金井塚1978）。

八耕地遺跡の調査は昭和43年に行われ、方形周溝墓と思われる土壙状の遺構から数点の吉ケ谷式土器が出土した。久米田遺跡の調査は、昭和45、46年に実施され、弥生時代後期の竪穴住居跡が２軒検出された。

西吉見条里Ⅱ遺跡では、弥生時代後期の遺構・遺物が確認された（弓2002）。

弥生時代後期～古墳時代前期ではあるが、三ノ耕地遺跡では方形周溝墓13基と竪穴住居跡１軒等が調査されている（太田1998）。その他少量の弥生土器が、田甲原遺跡、丸山遺跡、万神遺跡で採集されている（金井塚1978）。

周辺では東松山市岩鼻遺跡、観音寺遺跡、大里町円山遺跡等多数の遺跡が確認、調査されている。

古墳時代の調査例は上述の久米田遺跡のほか、大行山遺跡で前期の竪穴住居跡16軒、古墳跡９基、方形周溝墓１基等が検出され（弓1995）、三ノ耕地遺跡第１次調査では前方後方型周溝墓２基と方形周溝墓15基、古墳時代前期の竪穴住居跡８軒と溝跡、旧河川跡等が検出され（弓1997）、第２次には前方後方型周溝墓２基と方形周溝墓13基、その他前方後円墳１基（弓1997）などが検出された。下遺跡、西吉見条里Ⅱ遺跡でも古墳時代前期、後期の遺構、遺物が調査されている。

古墳時代前期の集落としては、市野川を挟んで対岸に標識遺跡として著名な東松山市五領遺跡や番清水遺跡、下道添遺跡等があり、番清水遺跡では大形の方形周溝墓が調査されている。

前期古墳としては、隣接する吉見丘陵縁辺に築造された全長60ｍの前方後方墳、山ノ根古墳が、一辺28ｍの方墳である山の根２号墳と対で存在している（埼玉県1982）。

古墳時代後期になると、平成５年に行われた大行山遺跡の発掘調査で、古墳跡11基と朝顔形埴輪棺１基が調査された（弓1995）。

西吉見条里遺跡、田甲原遺跡でも古墳時代後期の集落跡が調査されている。

吉見丘陵上の古墳群は、久米田古墳群、大行山古墳群、田甲原古墳群、市野川を挟んだ対岸の松山台地には古凍古墳群、柏崎古墳群がある。

久米田古墳群中のかぶと塚古墳は、墳丘規模26～28ｍの二段築成の円墳で、昭和48年に発掘調査が行われた。主体部は凝灰岩質砂岩の切石が用いられ、切組積みで構築された複室構造の胴張りがある横穴式石室である。全長12.5ｍを測る。副葬品は金環、ガラス小玉、鉄鏃、大刀、刀子、棒状鉄器、圭頭大刀があり、その他須恵器が出土している。６世紀後葉の築造とされている（塩野2004）。

その他吉見丘陵斜面には、国指定史跡吉見百穴横穴墓群をはじめ黒岩（金井塚1969）、岩粉山などの横穴墓群がある。

松山台地には、全長60ｍ前後の前方後円墳で銅釧と小型内行花文鏡を出土した、天神山古墳と帆立貝型のおくま山古墳、全長115ｍ以上の前方後円墳野本将軍塚古墳がある。

生産遺跡としては和名埴輪窯跡があり、昭和49年に４基の埴輪窯跡、平成14～15年に埴輪窯跡２基とその灰原の調査が行われた（弓2003）。６世紀後半の築造と考えられている。

奈良・平安時代の調査は田甲原遺跡、西吉見条里Ⅰ遺跡がある。松山台地の調査例では、東松山市山王裏遺跡、上川入遺跡、西浦遺跡がある。山王裏、

上川入遺跡では、寺院跡の地割り溝を確認している。西浦遺跡では、埋没谷、竪穴状遺構等から墨書土器が出土した（山本禎・西井幸雄1997）。

西吉見条里Ⅰ遺跡では、軸方向を揃えた住居跡や掘立柱建物跡、大規模な井戸跡が確認され、条里制の施行と関連した施行区域外に新規設営された計画集落の可能性が指摘されている。木製品等の遺物が多量に出土している（太田2005）。

西吉見条里Ⅱ遺跡では、古代「東山道武蔵路」と推定される道路跡が検出された。７世紀末の築造から約200年間使用され、９世紀後半に廃絶されたと考えられている（太田2002、弓2002）。なお三ノ耕地遺跡においても、道路遺構の側溝に該当すると思われる溝が確認されている。また西吉見条里Ⅱ遺跡からさらに北北東に約600ｍの地点においても、やはり軸を同じくする側溝と思われる溝状遺構が確認されている。

平安時代末から中世になると、武蔵七党や在地武士団の館跡が作られるようになる。本遺跡周辺部でも源範頼館、大串次郎館があり、金蔵院宝篋印塔（伝大串次郎重親塔）は、吉見町教育委員会により保存修理の事前調査が行われ、白磁四耳壺、渥美大甕が出土している（太田2000）。東松山市では野本氏館、鴻巣市では安達館、箕田館などが本遺跡周辺に位置している。

本遺跡の北西約700ｍにある松山城跡は、室町、戦国期の山城で、正慶３年（1334）に記事があるが、15世紀以後文献に多出し、慶長６年（1601）には廃城となった。「北東方向にやや小さな郭を並べて骨格とし、北側に各郭の下に幅広い郭を何段か配し、西側は幅の狭い帯郭状を複雑に連ねている。西側には現在は消失したが、堀・土塁で大きく区画した外郭があった」とされる（藤井尚夫1981）。吉見町教育委員会による調査は平成15、16年に実施され、土塁、溝跡、土坑などの遺構や、陶磁器類、鉄製品等の遺物が出土した。

今後松山城跡を中心とした地域の調査を行うことによって、本遺跡周辺の中世以後の歴史が明らかになると考えられる。

Ⅲ　遺跡の概要

発掘調査は、市野川左岸の堤防改修工事に伴うものであるため、調査区は、北西から南東方向に約460ｍと細長いものとなった。調査は、調査区を北から便宜的にＡ～Ｄ区の４区に分割して行った。

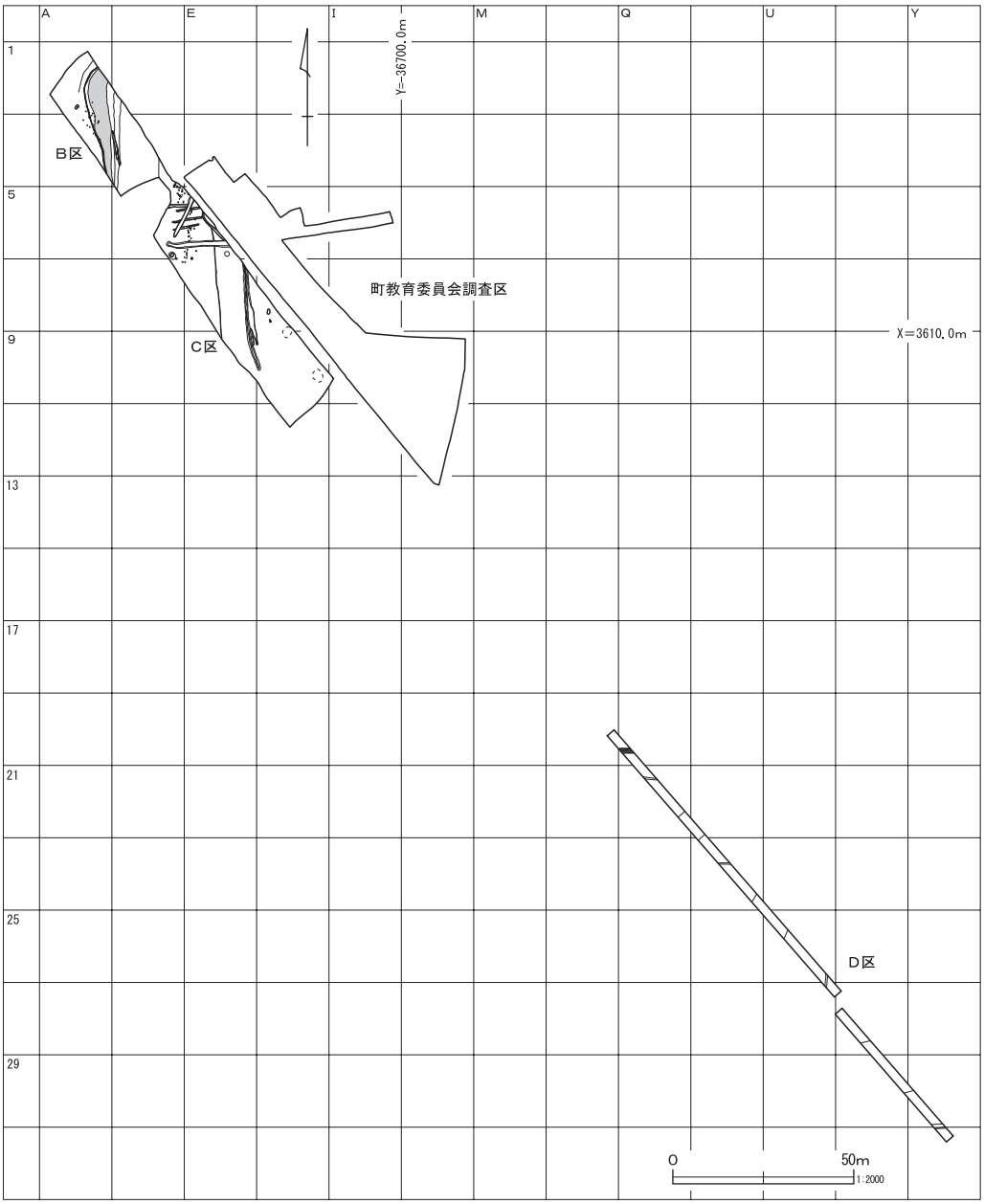
Ａ区については、市野川に沿ってトレンチを設定したところ、市野川旧河道内に当たっていることが判明したため、トレンチ調査に止めた。

Ｂ区では、土器集中地点２カ所、溝１条、土壙２基、堤防状の高まり１カ所、河川跡１カ所、谷地形１カ所、ピット等が検出された。

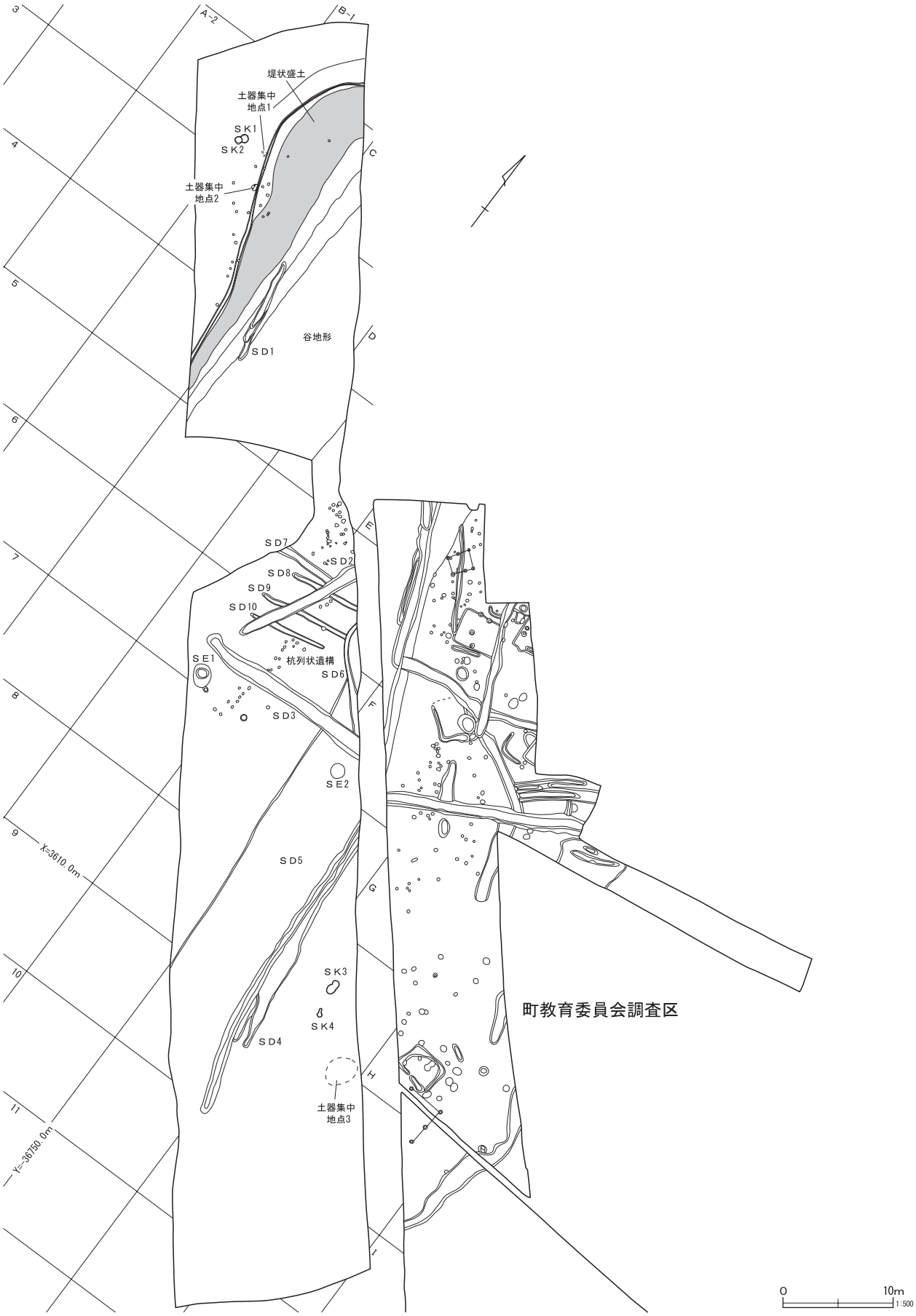
Ｃ区では、土器集中地点１カ所、溝２条、近世末～近代にかけての溝１条、井戸跡２基、時期不明の土壙２基、杭列及び溝６条が検出された。

なお、東側隣接地で吉見町教育委員会による発掘調査（第１地点）が実施されている。

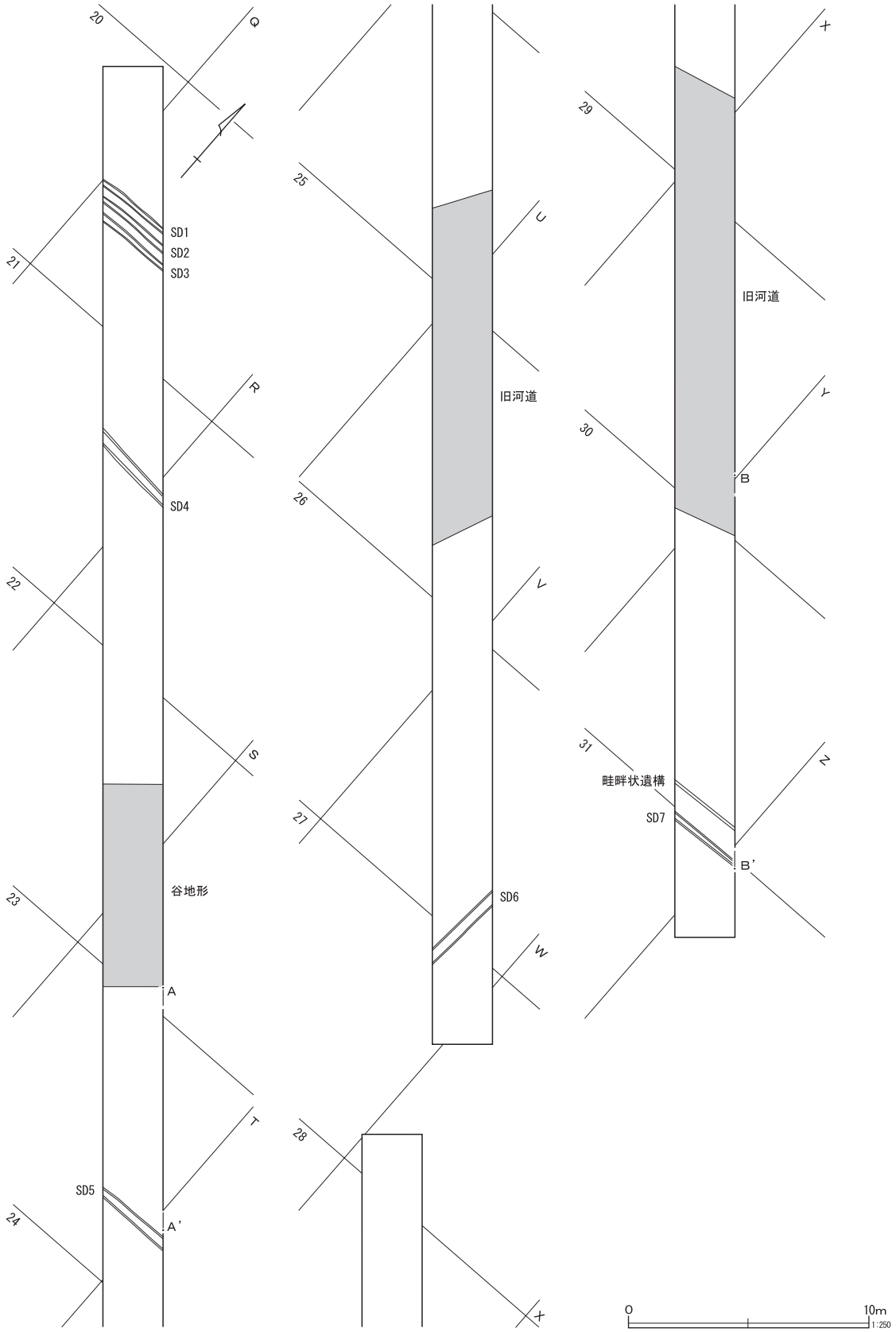
Ｄ区では、調査区に平行して２本のトレンチを設定した。溝跡６条と畦畔状の高まりとそれに接する溝跡１条が検出された。その他谷状の落ち込み１カ所、旧河川跡２カ所が検出された。この谷状の落ち込み、旧河川跡については、生涯学習文化財課による試掘調査で、表土下３ｍに古墳時代前期の遺物包含層があることが確認されていたが、湧水が著しく、さらに台風による度重なる冠水もあり、下部までの調査は断念した。



第４図　調査区全体図



第5図　B・C区遺構配置図


20
Q
21
SD1
SD2
SD3
R
SD4
22
S
谷地形
23
A
T
SD5
24
A'
25
U
旧河道
26
V
27
SD6
W
28
X
29
旧河道
Y
30
B
31
畦畔状遺構
SD7
Z
B'
0
10m
1:250

第６図　Ｄ区遺構配置図

Ⅳ　遺構と遺物

A区については、トレンチ調査に止まったため遺構と遺物は検出されなかった。またD区についても、台風による冠水のため遺構確認するに止まり、遺物も出土していない。

遺構と遺物が出土した調査区は、B区とC区で、B、C区は連続する調査区で、遺構番号も通し番号となっているため、以下では遺構ごとに一括して記述する。

1　井戸跡

井戸跡は2基検出された。湧水と台風による冠水のため、いずれも完掘することはできなかった。

第1号井戸跡（第7図）

C区のD－6グリッドで検出された。

平面形は、南北方向に長い楕円形で、南側にピットを伴う。規模は長径2.14ｍ、短径1.60ｍ、長軸方向はN－34°－Wである。断面形は、漏斗状になると予想される。

遺物は出土していないが、埋土の状態から構築時期は近世と考えられる。

第2号井戸跡（第7図）

C区のF－6グリッドで検出された。

平面形は円形で、規模は径1.32ｍ～1.38ｍを測る。断面形は、筒状になると予想される。

遺物は出土していないが、第1号井戸跡と同様近世と考えられる。

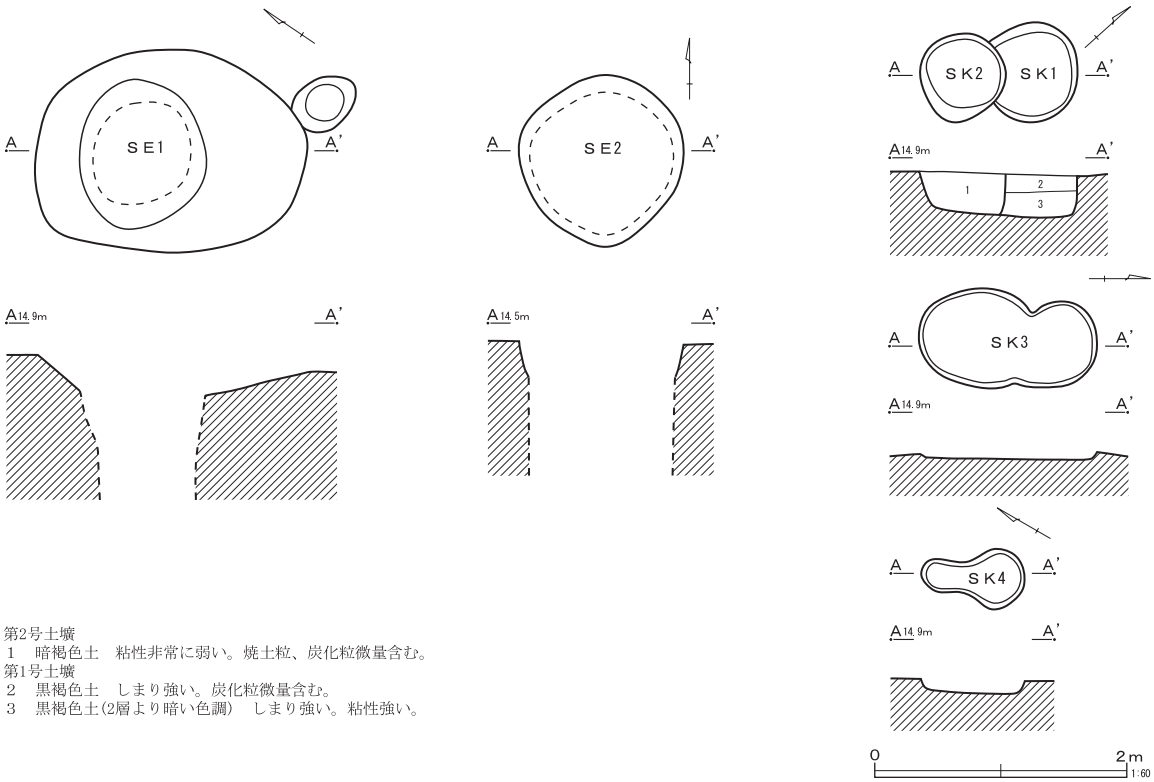
2　土壙

第1、2号土壙（第7図）

B区A、B－2グリッドに位置する。両土壙は重複し、第1号土壙は第2号土壙によって切られる。遺物はいずれも出土していない。

第1号土壙は、平面形は、略円形。径8.0ｍ、深さ0.33ｍを測る。

第2号土壙は、平面形は略円形で、南側がやや歪む。径0.72ｍ、深さ0.32ｍを測る。



第2号土壙
1　暗褐色土　粘性非常に弱い。焼土粒、炭化粒微量含む。
第1号土壙
2　黒褐色土　しまり強い。炭化粒微量含む。
3　黒褐色土(2層より暗い色調)　しまり強い。粘性強い。

第7図　第1・2号井戸跡　第1～4号土壙

第３号土壙（第７図）

Ｃ区Ｇ－８グリッドに位置する。第４号土壙の約１ｍ程北側にある。

平面形は、楕円形と円形を連接したような形状を呈する。長径1.42ｍ、短径0.68～0.76ｍ、深さ0.10ｍを測る。遺物は出土していない。

第４号土壙（第７図）

Ｃ区Ｇ－８グリッドに位置する。第３号土壙の約１ｍ程南側にある。

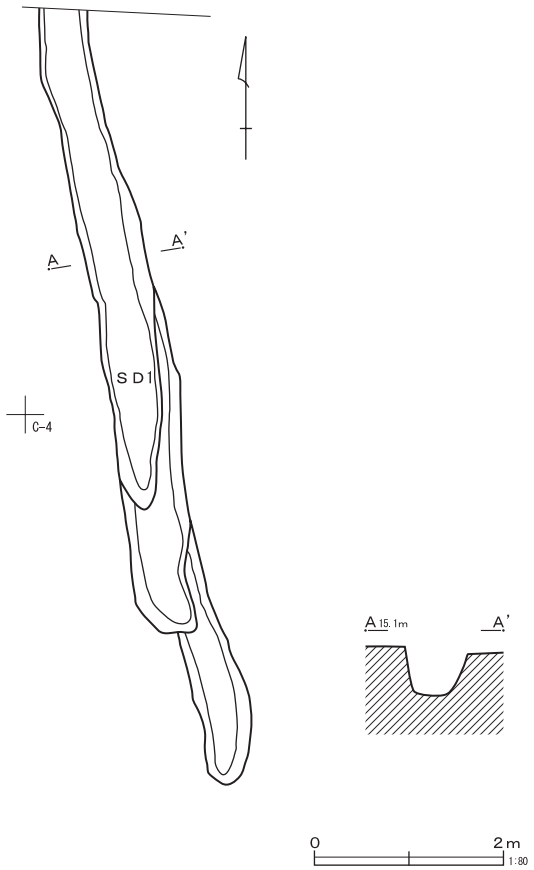
平面形は、小形の楕円形と円形を連接したような形状を呈する。径0.83ｍ、短径0.26～0.50ｍ、深さ0.10ｍを測る。遺物は出土していない。

３　溝跡

第１号溝跡（第８図）

Ｂ区Ｃ－３～４グリッドに位置する。

溝跡は、堤状遺構に沿って、また谷地形の落ち際に沿うような形で検出された。



第８図　第１号溝跡

規模は、全長は10.0ｍ、幅0.52～0.80ｍ、深さ0.48ｍを測る。走行方位はＮ－12°－Ｗで、ほぼ南北方向となる。

溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。南半部で、掘り直しのためかやや形状が乱れている。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から平安時代（９世紀代）のものと判断される。

第２号溝跡（第10図）

Ｃ区のＤ－５～６、Ｅ－５グリッドで検出された。

北側は調査区外へ延びていたため、全体を明らかにすることはできなかった。

規模は、全長は12.04ｍ、幅1.0～1.50ｍ、深さ0.21ｍを測る。走行方位はＮ－24°－Ｅである。

溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。第７～10号溝跡を切って掘削されている。

遺物は出土していない。

吉見町教育委員会による調査の第４号溝跡と繋がる可能性が強い。同溝跡の出土遺物をみると９世紀前半と考えられる。

第３号溝跡（第９、15図）

Ｃ区のＤ～Ｆ－６グリッドで検出された。

東側は調査区外へ延びる。

規模は、全長は17.60ｍ、幅1.30～1.82ｍ、深さ0.43ｍを測る。走行方位はＮ－Ｓである。

溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。第５～６号溝跡を切って掘削されている。

出土遺物は、近世陶器が出土しており２点図示した。同巧の小碗で、19世紀前半と考えられる。

第４号溝跡（第11、15図）

Ｃ区のＦ－７～10、Ｇ－９～10グリッドで検出された。

規模は、全長は30.20ｍ、幅1.30～1.82ｍ、深さ0.44ｍを測る。走行方位はＮ－９°－Ｗである。

溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。第５号溝跡を切って掘削されている。

北側は調査区外へ延びており、吉見町教育委員会

による調査の第１号溝跡と繋がる可能性がある。同溝跡は、出土遺物をみると９世紀前半と考えられ、「東側の壁際で溝と同方向に再掘削した痕跡」が検出されており、この部分が第４号溝跡に対応すると考えられる。

出土遺物は長頸瓶、高坏、坏を図示したが、長頸瓶破片が本溝跡に伴う。グリッド出土の須恵器蓋（第22図８）が、本溝跡出土の小破片と接合した。町教委調査第１号溝跡とほぼ同時期と考えられる。

第５号溝跡（第11、15図）

Ｃ区のＥ－６～８､Ｆ－６～９グリッドで検出された。

規模は、全長は19.80ｍ、幅4.30～4.80ｍを測り、深さは８㎝前後と極く浅い。走行方位はＮ－６°－Ｗで、ほぼ南北方向に掘削された溝跡である。

溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。第４号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

南、北側は調査区外へ延びる。北側は、やや屈曲して吉見町教育委員会による調査の第１号溝跡と繋がると考えられる。同溝跡は、出土遺物をみると９世紀前半と考えられ、「西側の壁及び溝の進行方向は調査区外になるが最大検出幅は５ｍ」とされ、本調査区第５号溝跡とほぼ同規模である。

出土遺物は須恵器坏底部を２点図示した。いずれも底部がやや厚く、円柱技法の痕跡を止めている。グリッド出土の須恵器高台付坏（第22図６）が、本溝跡出土の小破片と接合している。

第６号溝跡（第５、10図）

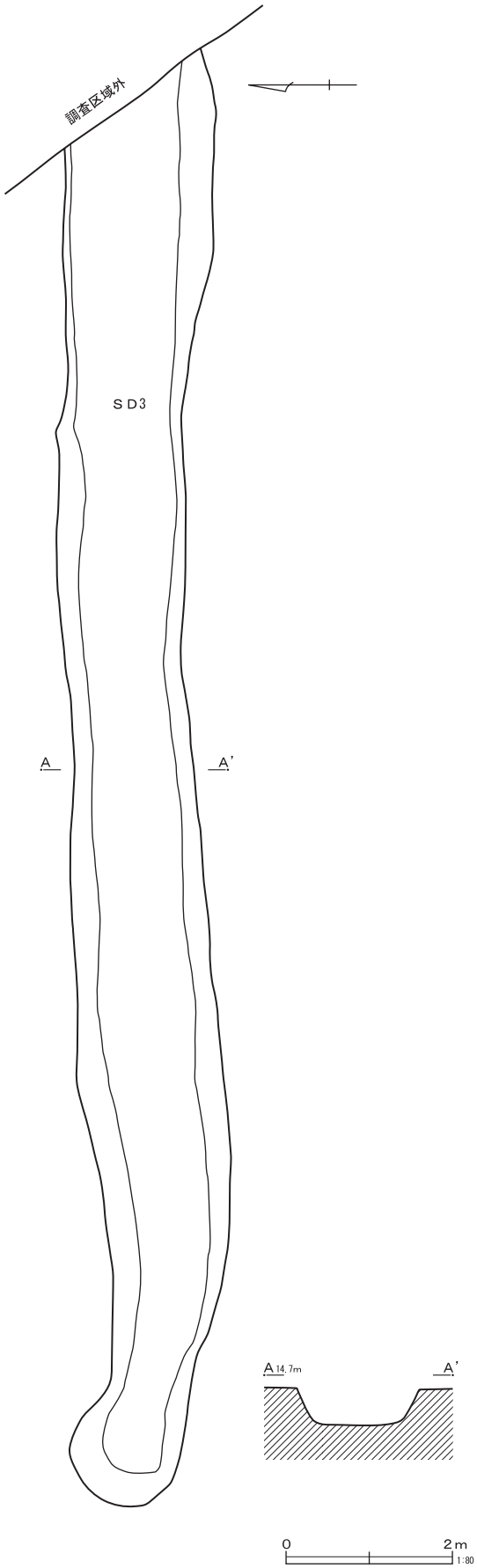
Ｃ区のＥ－５～６、Ｆ－６グリッドで検出された。

規模は、全長は10.5ｍ、幅0.36～0.54ｍを測り、深さは９㎝で浅い。溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。

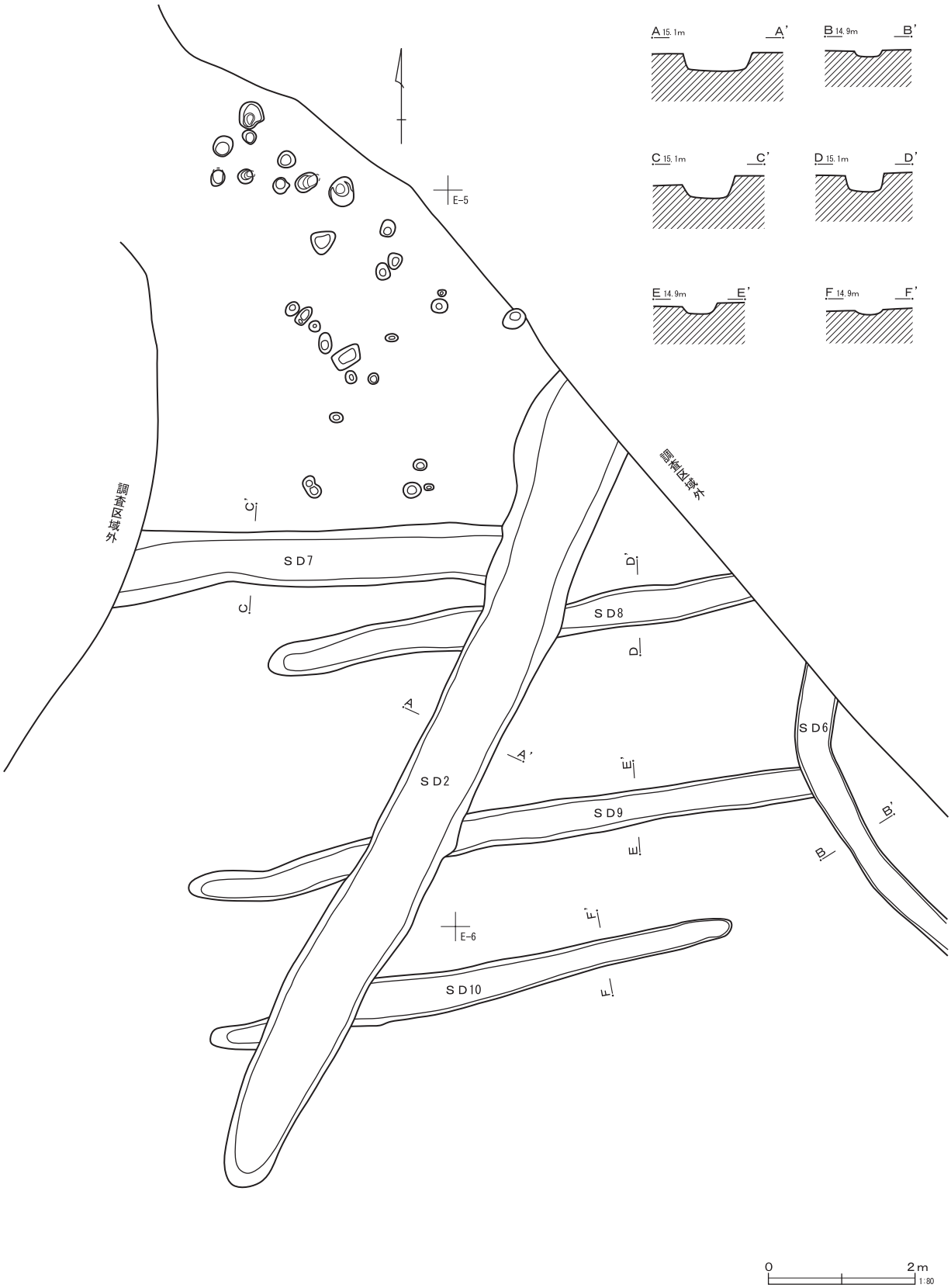
走行方位は、概ねＮ－35°－Ｗであるが、北側で屈曲して調査区外に延びる。北側は、吉見町教育委員会による調査区が隣接するが、規模等で対応する溝跡は検出されていない。

第３号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

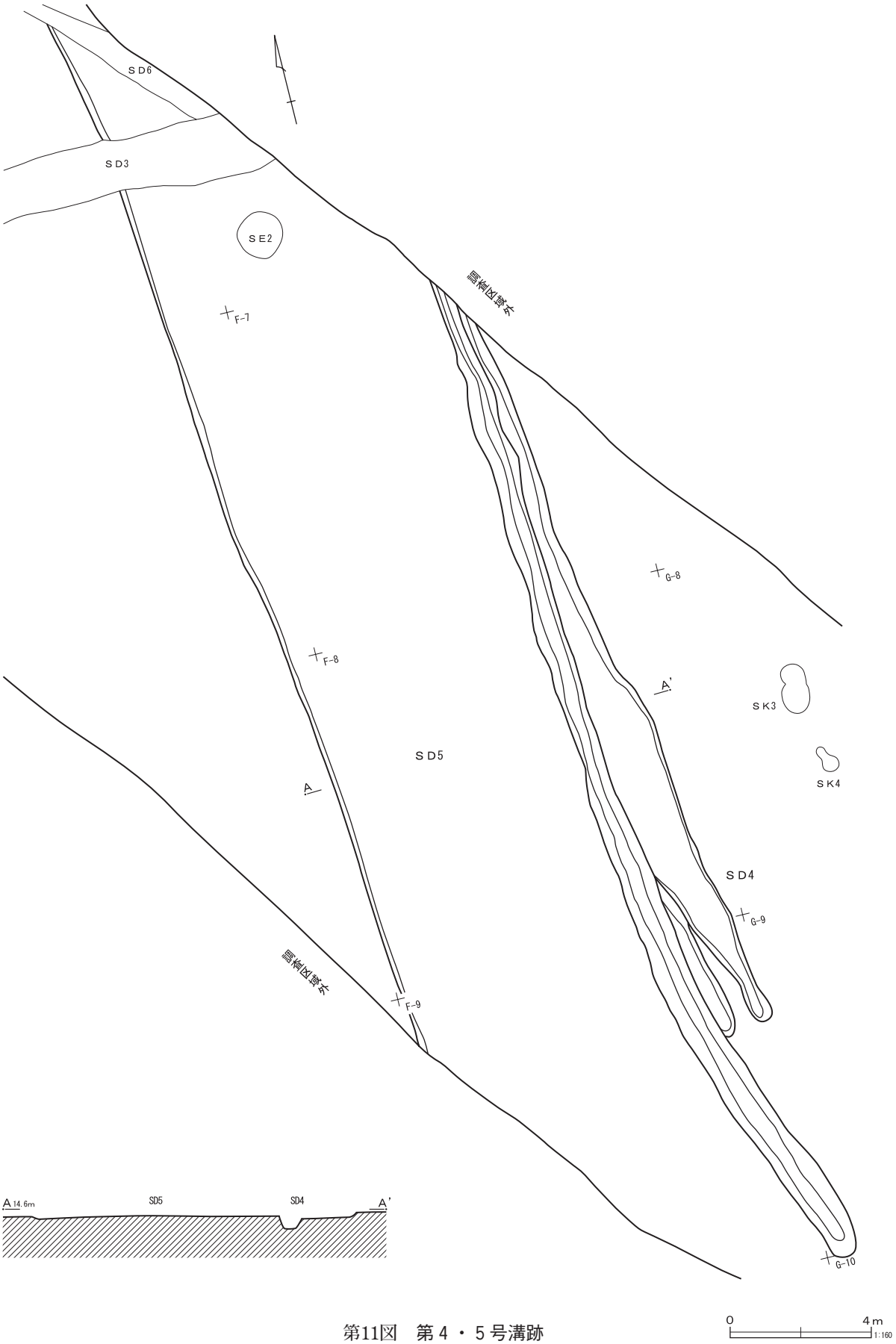
遺物は出土していない。



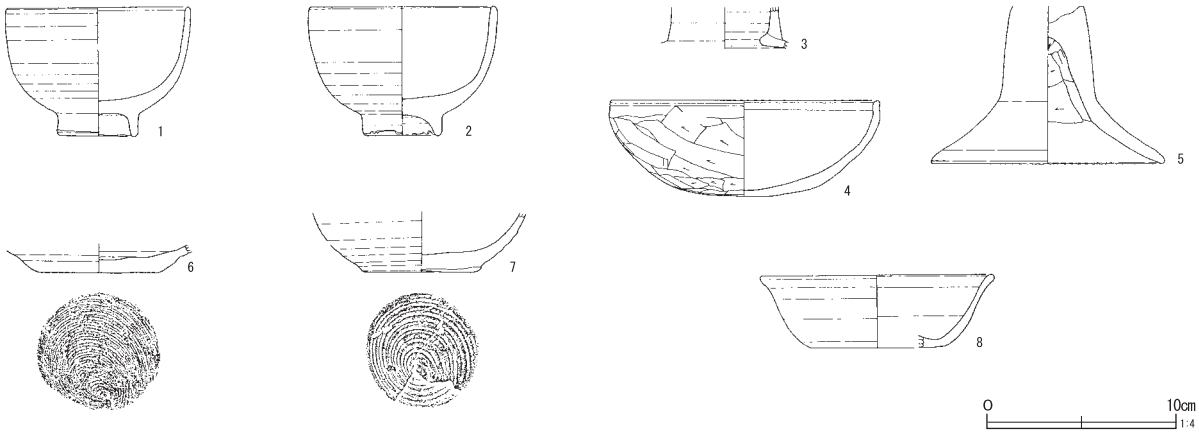
第９図　第３号溝跡



第10図　第２・７・８・９・10号溝跡


SD6
SD3
SE2
F-7
F-8
F-9
G-8
G-9
G-10
A
A'
SD5
SD4
SK3
SK4
A 14.6m
SD5
SD4
A'
0
4m
1:160

第11図　第４・５号溝跡



第12図　第３～５号溝跡　ピット出土遺物

第２表　溝跡、ピット出土遺物観察表

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎　　土	焼成	色　調	出土遺構	備　　考
1	陶器	高台付小椀	9.6	6.8	4.0	90	精緻	良好	淺黄	ＳＤ3	内外面亀裂釉
2	陶器	高台付小椀	9.6	6.8	3.8	90	精緻	良好	にぶい黄橙	ＳＤ3	内外面亀裂釉
3	須恵器	長頸瓶		(2.2)		50	砂粒　黒粒	良好	灰オリーブ	ＳＤ4	外面自然釉付着
4	土師器	坏	14.2	4.9		30	砂粒　赤粒	良好	淺黄	ＳＤ4	外面摩滅顕著
5	土師器	高坏		(8.3)	(12.2)	40	砂粒　白粒　赤粒　石英　角閃石	良好	にぶい黄褐	ＳＤ4	外面摩滅顕著
6	須恵器	坏		(1.5)	(6.6)	80	砂粒　白粒　石英　針	良好	灰黄	ＳＤ5	ロクロ左回転
7	須恵器	坏		(3.2)	(6.3)	70	砂粒　白粒　針	良好	灰白	ＳＤ5	ロクロ右回転
8	須恵器	坏	(12.2)	(3.8)	(7.0)	30	砂粒　白粒　針	良好	灰黄	ピット11	ロクロ右回転か

第７号溝跡（第10図）

Ｃ区のＤ－５グリッドで検出された。西側は調査区外に延びる。

第７～10号溝跡は、ほぼ併行して東西方向に走行する、比較的小規模な溝群であるが、本溝跡は北端部に位置している。

規模は、全長は5.38ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.31ｍを測る。溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。走行方位は、概ねＮ－92°－Ｗである。

第２号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

遺物は出土していない。

第８号溝跡（第10図）

Ｃ区のＤ、Ｅ－５グリッドで検出された。東側は調査区外に延びる。

規模は、全長は6.80ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.23ｍを測る。溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。走行方位は、Ｎ－100°－Ｗである。

第２号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

遺物は出土していない。

第９号溝跡（第10図）

Ｃ区のＤ、Ｅ－５グリッドで検出された。

規模は、全長は8.64ｍ、幅0.44ｍ、深さ0.13ｍを測る。溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。走行方位は、Ｎ－80°－Ｅである。

第２、６号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

遺物は出土していない。

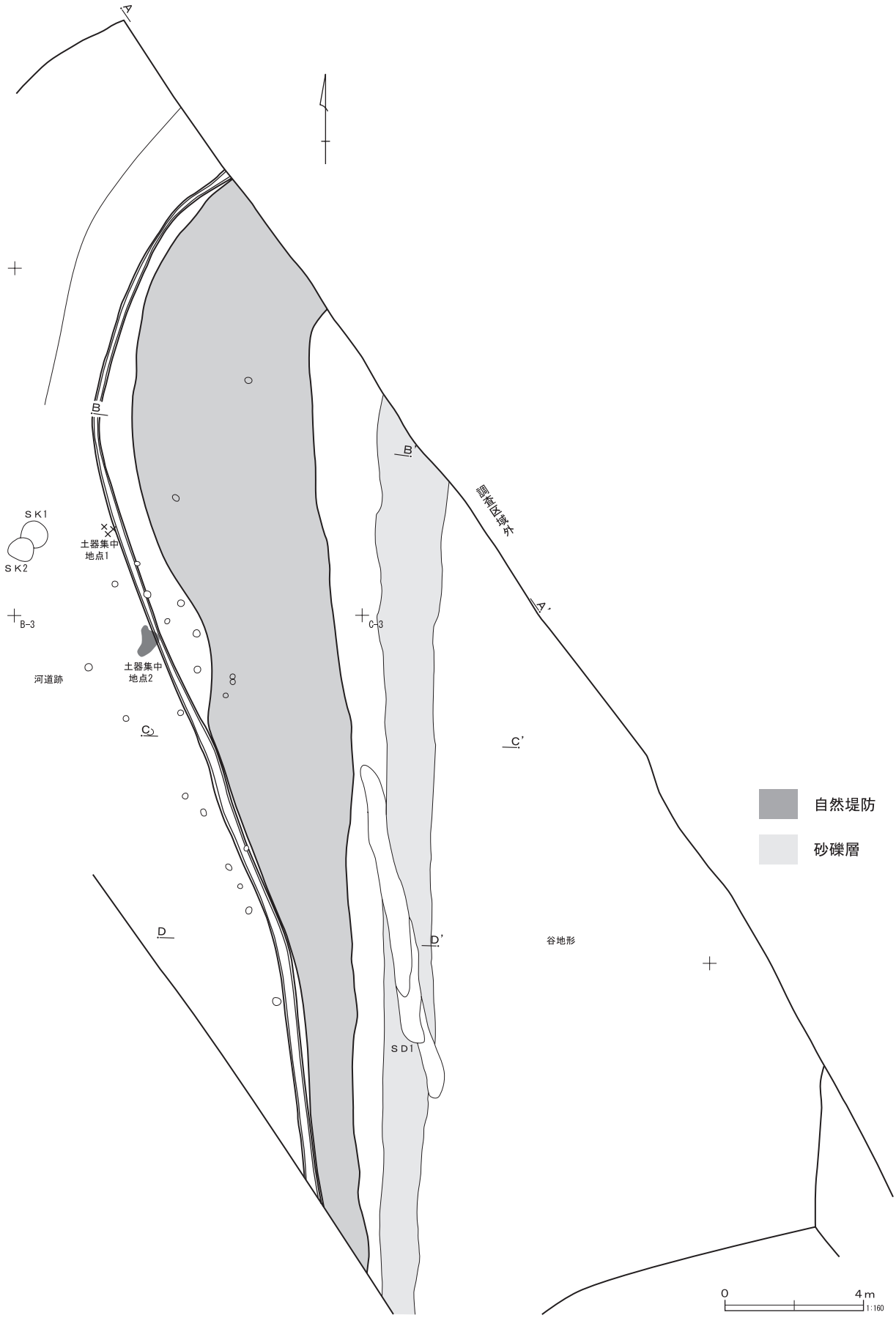
第10号溝跡（第10図）

Ｃ区のＤ、Ｅ－６グリッドで検出された。

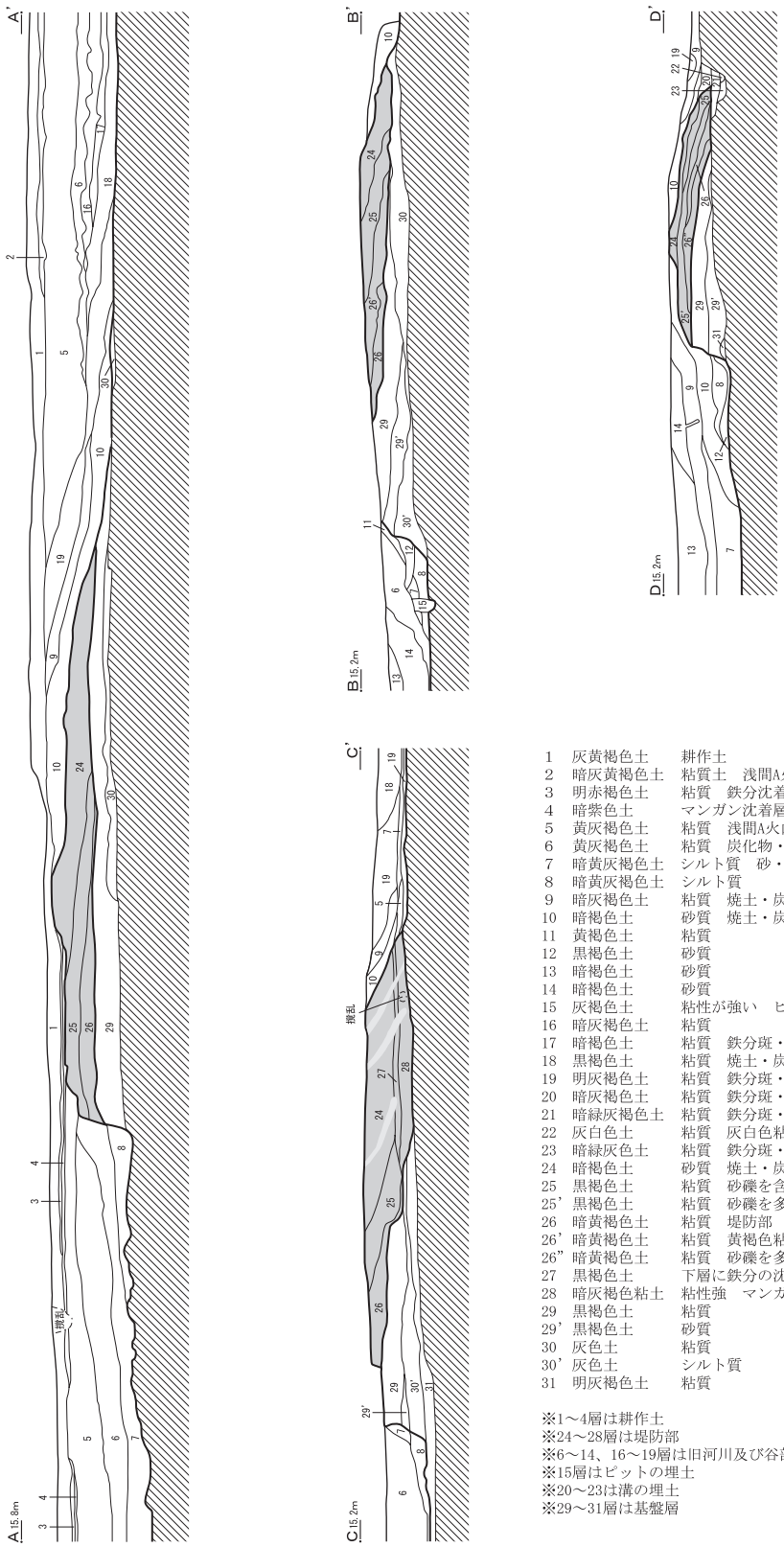
規模は、全長は7.30ｍ、幅0.37ｍ、深さ0.07ｍを測る。溝底面はほぼ平坦で、直線的に立ち上がっている。走行方位は、Ｎ－103°－Ｗである。

第２号溝跡が、本溝跡を切って掘削されている。

遺物は出土していない。


A
B
B'
C
C'
D
D'
A'
SK1
SK2
土器集中
地点1
土器集中
地点2
B-3
C-3
河道跡
SD1
谷地形
自然堤防
砂礫層
0
4m
1:160

第13図　堤状盛土遺構



1　灰黄褐色土　耕作土
2　暗灰黄褐色土　粘質土　浅間A火山灰？を含む
3　明赤褐色土　粘質　鉄分沈着層
4　暗紫色土　マンガン沈着層
5　黄灰褐色土　粘質　浅間A火山灰・炭化物・焼土を含む　近世の遺物が出土
6　黄灰褐色土　粘質　炭化物・焼土粒子を含む
7　暗黄灰褐色土　シルト質　砂・礫を微量含む
8　暗黄灰褐色土　シルト質
9　暗灰褐色土　粘質　焼土・炭化物粒子・砂礫を含む
10　暗褐色土　砂質　焼土・炭化物粒子・砂礫・浅間B火山灰を含む
11　黄褐色土　粘質
12　黒褐色土　砂質
13　暗褐色土　砂質
14　暗褐色土　砂質
15　灰褐色土　粘性が強い　ピット覆土
16　暗灰褐色土　粘質
17　暗褐色土　粘質　鉄分斑・マンガン結核を多く含む
18　黒褐色土　粘質　焼土・炭化物粒子を含む
19　明灰褐色土　粘質　鉄分斑・マンガン結核・砂礫を含む
20　暗灰褐色土　粘質　鉄分斑・砂礫を含む　溝埋土
21　暗緑灰褐色土　粘質　鉄分斑・炭化物粒子を含む　溝埋土
22　灰白色土　粘質　灰白色粘土ブロック　溝埋土
23　暗緑灰色土　粘質　鉄分斑・灰色粘土を含む　溝埋土
24　暗褐色土　砂質　焼土・炭化物粒子・砂礫を含む　須恵器破片が出土　堤防部
25　黒褐色土　粘質　砂礫を含む　堤防部
25'　黒褐色土　粘質　砂礫を多く含む　堤防部
26　暗黄褐色土　粘質　堤防部
26'　暗黄褐色土　粘質　黄褐色粘土をブロック状に含む　堤防部
26"　暗黄褐色土　粘質　砂礫を多く含む　堤防部
27　黒褐色土　下層に鉄分の沈着が著しい
28　暗灰褐色粘土　粘性強　マンガンの沈着と鉄分が沈着
29　黒褐色土　粘質
29'　黒褐色土　砂質
30　灰色土　粘質
30'　灰色土　シルト質
31　明灰褐色土　粘質

※1～4層は耕作土
※24～28層は堤防部
※6～14、16～19層は旧河川及び谷部の埋土
※15層はピットの埋土
※20～23は溝の埋土
※29～31層は基盤層

第14図　堤状盛土遺構断面図

5　堤状盛土遺構（第12、13図）

Ｂ区のＢ－１～４グリッドで検出された。Ｂ区北端部に位置し、ほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｗ）に走行する。北端部で東方向に屈曲し、調査区外に延びる。堤幅は北側が広く（5.2ｍ）、南側に向かって次第に狭く（1.36ｍ）なり、調査区外に延びている。

第１号溝跡は、盛土北半部からの延長線上に位置している。盛土南半部の幅は、溝跡を含めると約4.6ｍで、北半部とほぼ同規模となる。

堤状盛土の基本土層は、黒褐色土と暗褐色土の締まった粘質土（第24層～第27層）が交互に堆積しており、この堆積土は砂礫を多量に含む層が多い。河床面からは、約２ｍ程の高まりとなっている。

出土遺物は、土師器、須恵器が出土し、８～９世紀代と見られるが、摩滅が顕著で図示できるものはなかった。

6　杭列状遺構（第14、15図）

Ｃ区のＥ－５～７グリッドで検出され、調査区北半部に位置する。

ピットは必ずしも一列に並んでいるわけではなく、幅約0.5～1.0ｍの範囲内にあり、全長約14.5ｍに及んでいる。２列程の走行が考えられ、Ｐ４とＰ７は2.45ｍの間隔があり、東側に張り出している。走行方向は、ほぼ南北（Ｎ－５°－Ｅ）である。ピットの深さは、南側の方が概して深いものが多い。

第２号溝跡や東西方向の溝跡群（第３、７～10号溝跡）と位置的に重なるが、かろうじて重複しておらず、むしろ避けて構築されたような分布状況である。

遺物は出土していないが、溝跡群と同時期（近世）と考えておく。

7　ピット群（第10図）

Ｃ区のＤ－４～５グリッドで検出され、調査区北端部に位置する。

ピットは直線的に並ぶものもあるが、杭列或いは掘立柱建物跡等を想定できる程ではない。

第２号溝跡と東西方向の溝跡群（第３、７～10号溝跡）の北側に分布している。約４×６ｍの範囲内で、比較的北側が密に分布している。杭列状遺構と同様、溝跡群を避けたような分布状態を示している。

遺物は出土していないが、杭列状遺構と同時期（近世）と考えておく。

8　谷地形（第５、12図）

Ｂ区のＣ－２～４、Ｄ－３～４グリッドに位置し堤状盛土の東側で検出された谷地形で、南側に向かって開口する。

出土遺物は、須恵器大形甕の口縁部と胴部の破片が３点出土しているが、図示できる程ではなかった。いずれも胎土中に白色針状物質を含んでおり、南比企産である。

9　土器集中地点

土器集中地点１（第12、16、17図）

Ｂ区のＢ－２グリッドで検出された。

旧河川埋没後、堤状の高まりとの境あたりに形成されたものである。周辺部に竪穴住居跡、土壙等の掘り込みは認められなかった。

土師器甕形土器を主体とする、多量の胴部細片が径約50㎝の範囲に、ほぼ水平に集中して出土した。

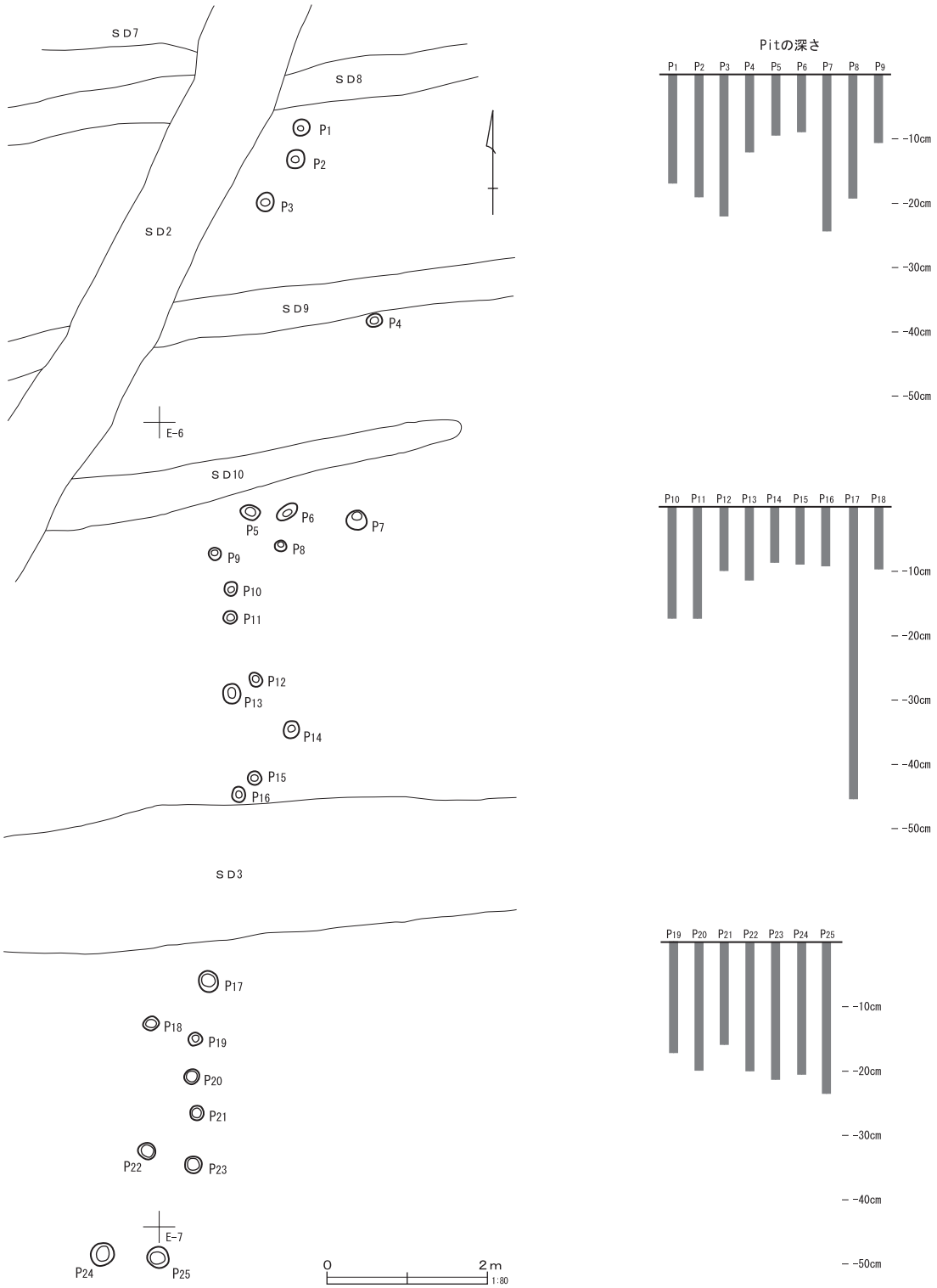
出土遺物は胴部の細片が多く、図示できたものは底部２点と脚接合部１点である。

２は底径がやや大きく、他の２点よりもやや古い形態を持つ。

土器集中地点２（第12、18図）

Ｂ区のＢ－３グリッドで検出された。土器集中地点１の南側約３ｍの位置にあたる。土器集中地点１と同様、旧河川埋没後、堤状の高まりとの境あたりに形成されたものである。

中心部に細長い、やや扁平な石を置き、その周辺部に、径約80㎝の範囲に土師器甕形土器が集中して出土した。

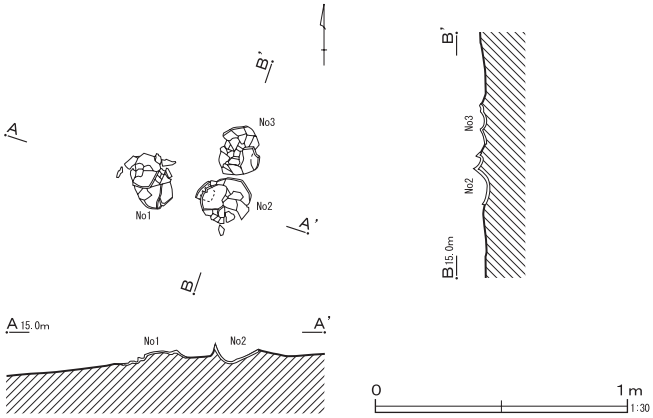


第15図　杭列状遺構

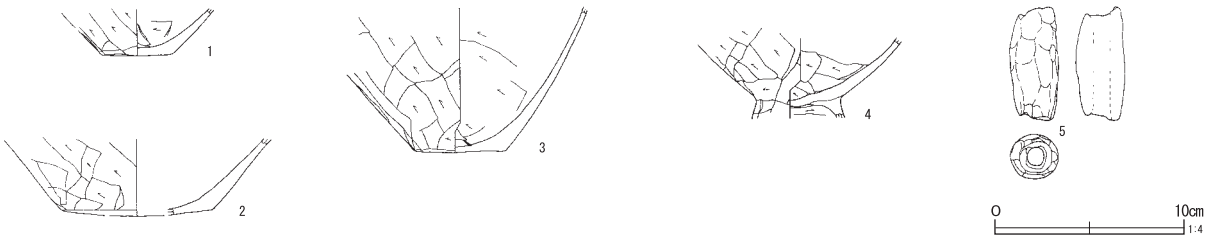
周辺部に竪穴住居跡、土壙等の掘り込みは認められなかったが、土器の分布範囲を取り囲むように10本前後のピットが検出されている。

ピットの配置は、明確に掘立柱建物跡の存在を示すものではないが、置き柱を想定すると、北西隅にピットが検出されていないが、Ｐ２、Ｐ10、Ｐ５、Ｐ８、Ｐ９の配置は、１間×２間（2.58ｍ×2.70ｍ）の掘立柱建物跡と考えることもできる。長軸方向は、Ｎ－32°－Ｗとなる。

出土遺物は、「コ」字状口縁甕形土器の細片がほ



第16図　土器集中地点１



第17図　土器集中地点１出土遺物

第３表　土器集中地点１、２出土遺物観察表

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎　　土	焼成	色　調	出土遺構	備　　考
1	土師器	甕底部		(2.4)	3.8	80	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	にぶい黄橙	土器集中地点２	第一面
2	土師器	甕底部		(4.0)	(8.0)	20	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	橙	土器集中地点１	No. 1
3	土師器	甕底部		(7.5)	4.6	80	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	明赤褐	土器集中地点１	No. 3
4	土師器	台付甕		(4.2)		70	砂粒　白粒　角閃石	良好	明赤褐	土器集中地点１	No. 2
5	土製品	土錘	幅	長	孔						
			2.6	5.9	1.1	100	砂粒	良好	橙	土器集中地点２	ピット４

とんどで、甕底部１点と土錘を図示した。

破片ではあるが、口唇部の作出手法をみると外面に段をもっており、地点１より本地点のほうがやや新しい。また底部破片を見ると、甕形土器は少なくとも２個体分は存在したと考えられる。

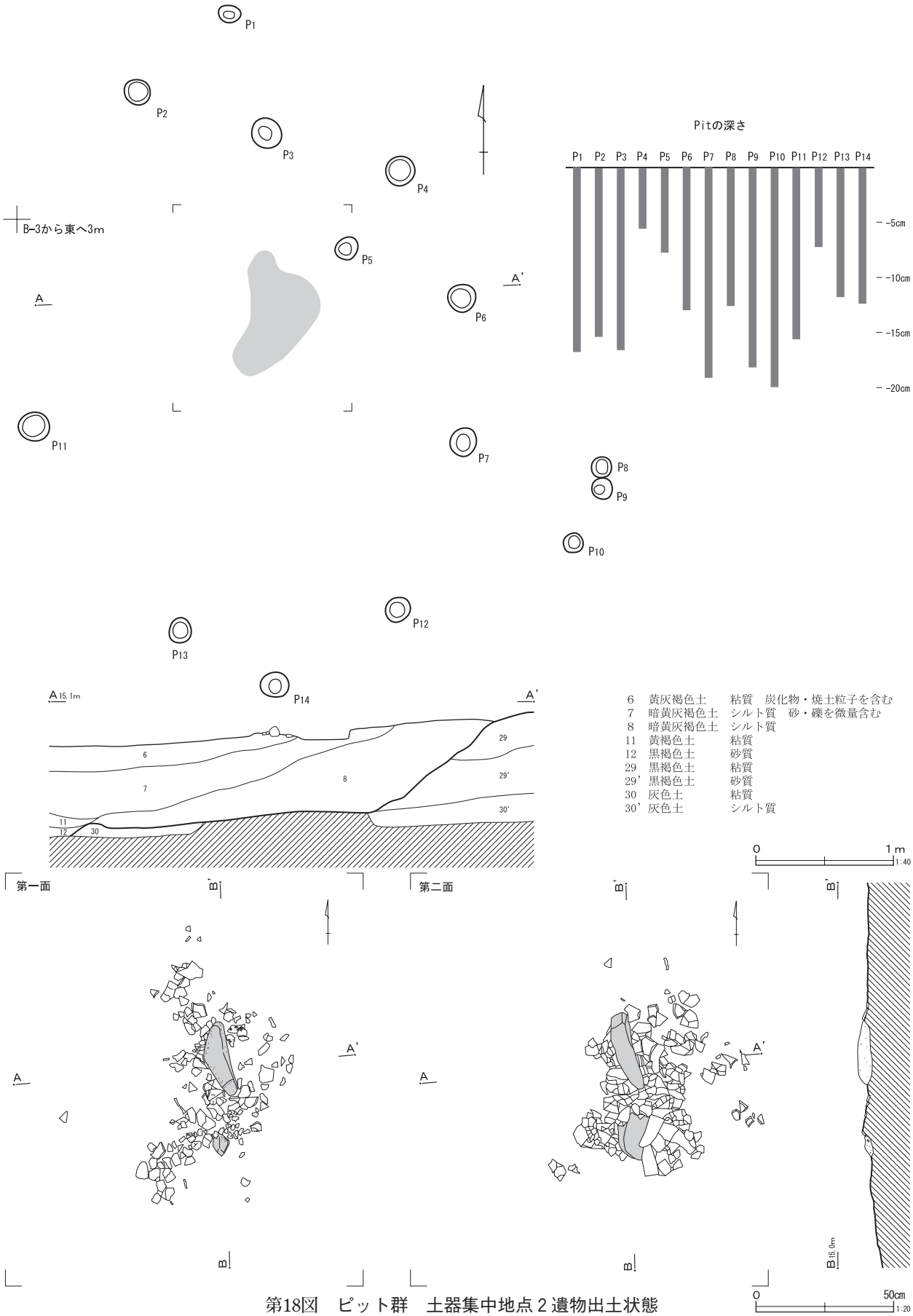
土器集中地点３（第12、19、20図）

Ｃ区のＧ－８～９グリッドで検出された。

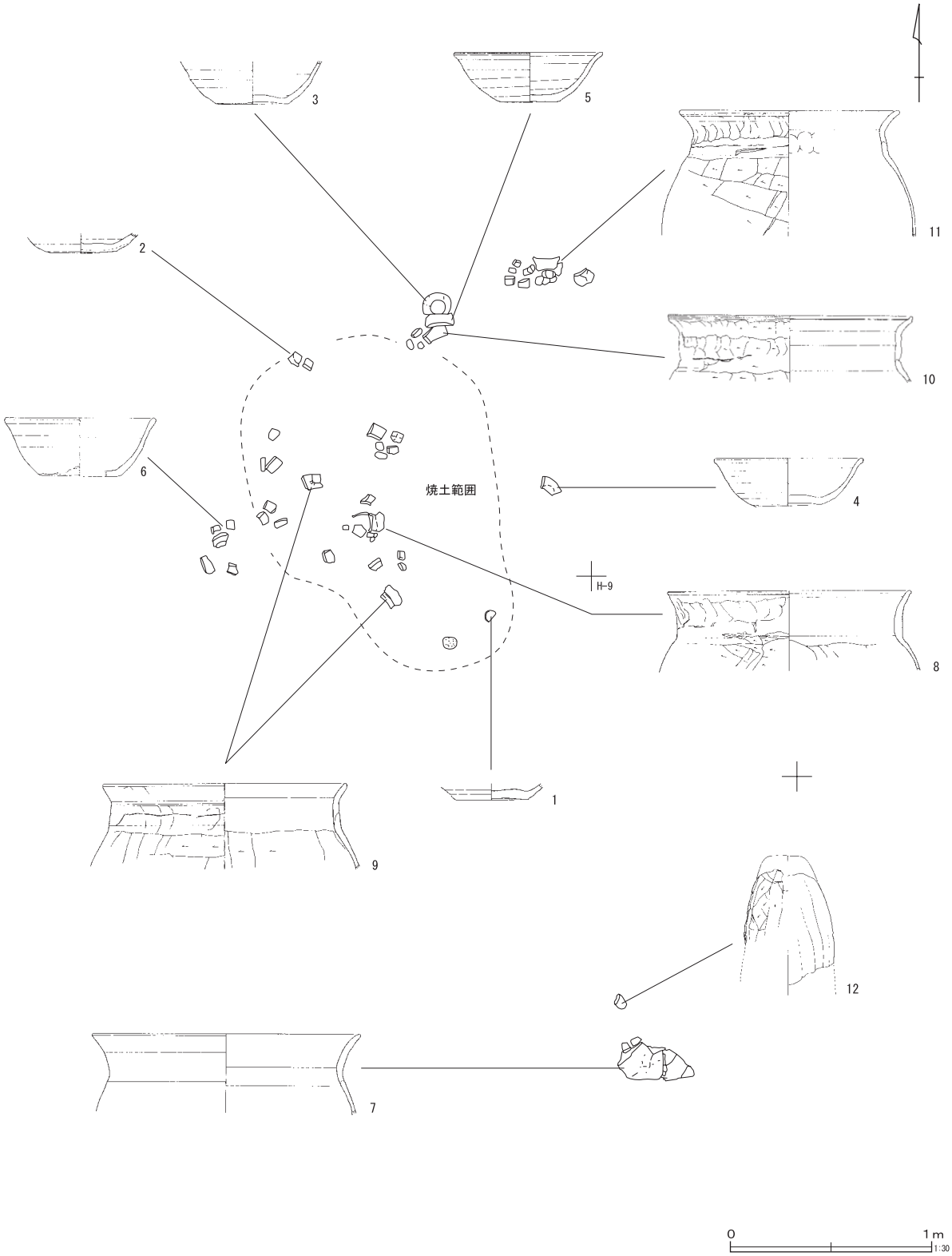
第５号溝跡の東側約７ｍの位置にあたる。北側は直ぐに調査区外となるが、吉見町教育委員会による調査区に隣接している。同調査区では竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出されている。いずれも９世紀前半～中頃と考えられている。その他ピットが多数検出されている。

土器集中範囲は、概ね３カ所に分かれる。北側の２カ所と、南側に約２ｍ離れた位置のものである。北側の分布範囲は、長径2.5ｍ×短径1.8ｍで、中心に略楕円形状に焼土（長径1.8ｍ×短径1.2ｍ）が分布していた。南側では、土製支脚、土師器甕形土器が出土した。北側の分布範囲では、土師器甕形土器と須恵器坏が出土している。

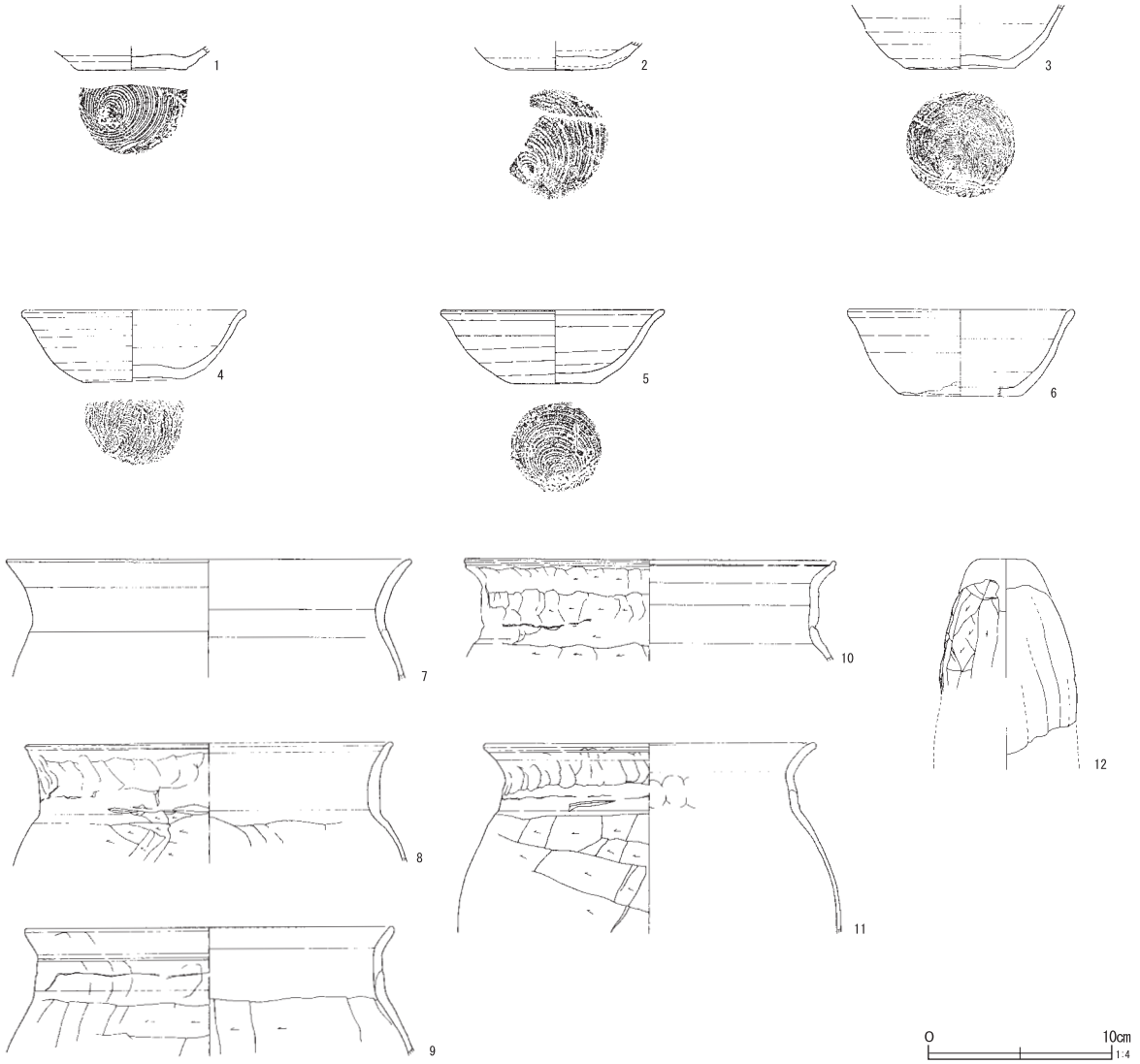
周辺部に竪穴住居跡、土壙等の掘り込みは認められなかったが、周辺グリッド（Ｆ－７～８、Ｇ－８～９、Ｈ－９）の出土遺物を考慮すると、竪穴住居跡があった可能性がある。



第18図　ピット群　土器集中地点２遺物出土状態



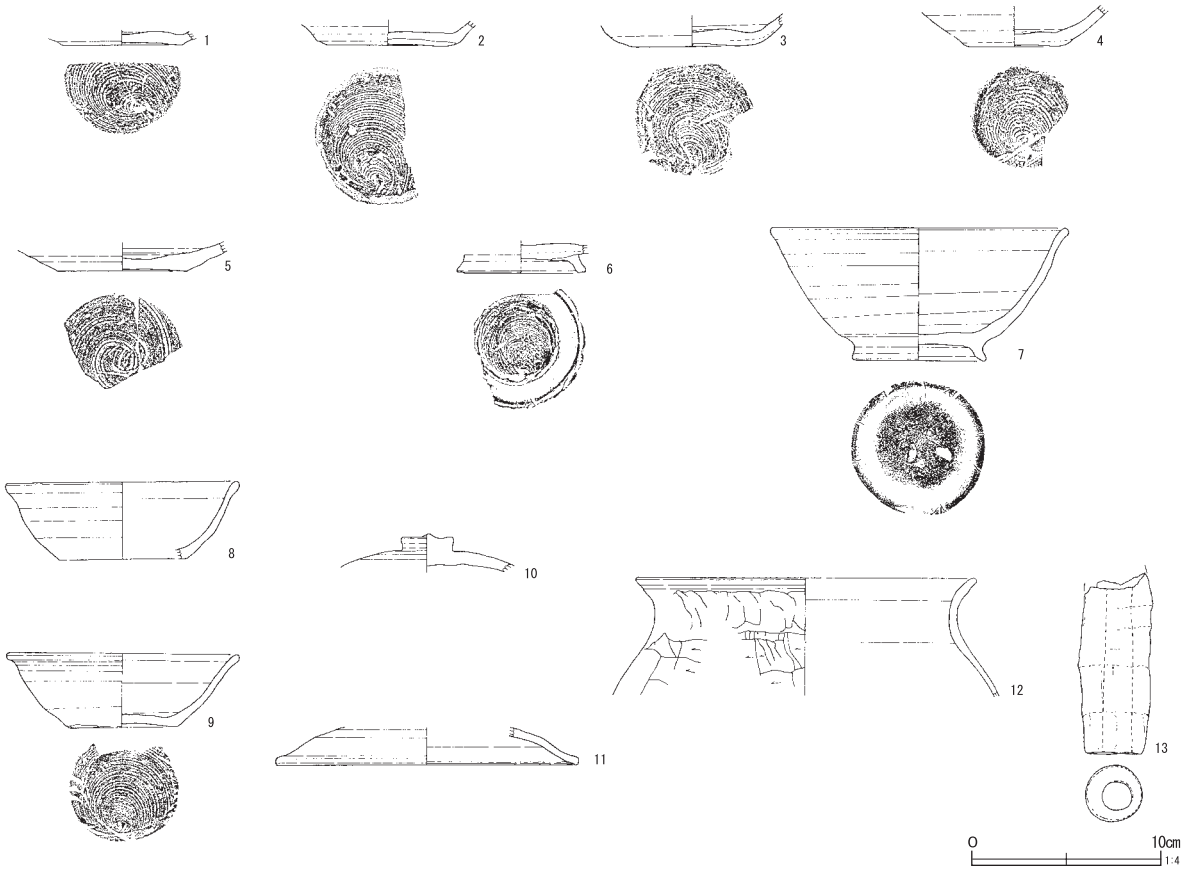
第19図　土器集中地点３出土遺物分布図



第20図　土器集中地点３出土遺物

第４表　土器集中地点３出土遺物観察表

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎　　土	焼成	色　調	出土遺構	備　　考
1	須恵器	坏		(1.3)	6.0	60	砂粒　針	良好	灰	Ｇ８、９	ロクロ左回転
2	須恵器	坏		(1.6)	6.0	70	砂粒　赤粒　黒粒　角閃石　針	良好	灰白	Ｇ８、９	No.1　ロクロ左回転か
3	須恵器	坏		(3.5)	6.0	70	砂粒　角閃石　針	良好	灰白	Ｇ８、９	No.2
4	須恵器	坏	(12.2)	3.8	5.3	50	砂粒　針	良好	灰白	Ｇ８、９	No.5　ロクロ右回転
5	須恵器	坏	(12.2)	4.0	5.2	50	砂粒　白粒　針	良好	灰	Ｇ８、９	No.2　ロクロ左回転
6	須恵器	坏	(12.0)	(3.7)	(6.8)	25	砂粒　針	良好	灰白	Ｇ８、９	No.16　ロクロ右回転
7	土師器	甕	(22.0)	(6.4)		15	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	橙	Ｇ８、９	No.20
8	土師器	甕	(20.0)	(6.5)		20	砂粒　白粒　角閃石	良好	橙	Ｇ８、９	No.11
9	土師器	甕	(20.0)	(6.8)		30	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	橙	Ｇ８、９	No.8、18
10	土師器	甕	(20.2)	(5.5)		25	砂粒　白粒　角閃石	良好	にぶい赤褐	Ｇ８、９	No.3
11	土師器	甕	(18.0)	(10.2)		20	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	橙	Ｇ８、９	No.4
12	土製品	土製支脚		(9.6)		70	砂粒　石英　片岩	良好	にぶい褐	Ｇ９	粘土紐巻き付け



第21図　グリッド出土遺物（1）

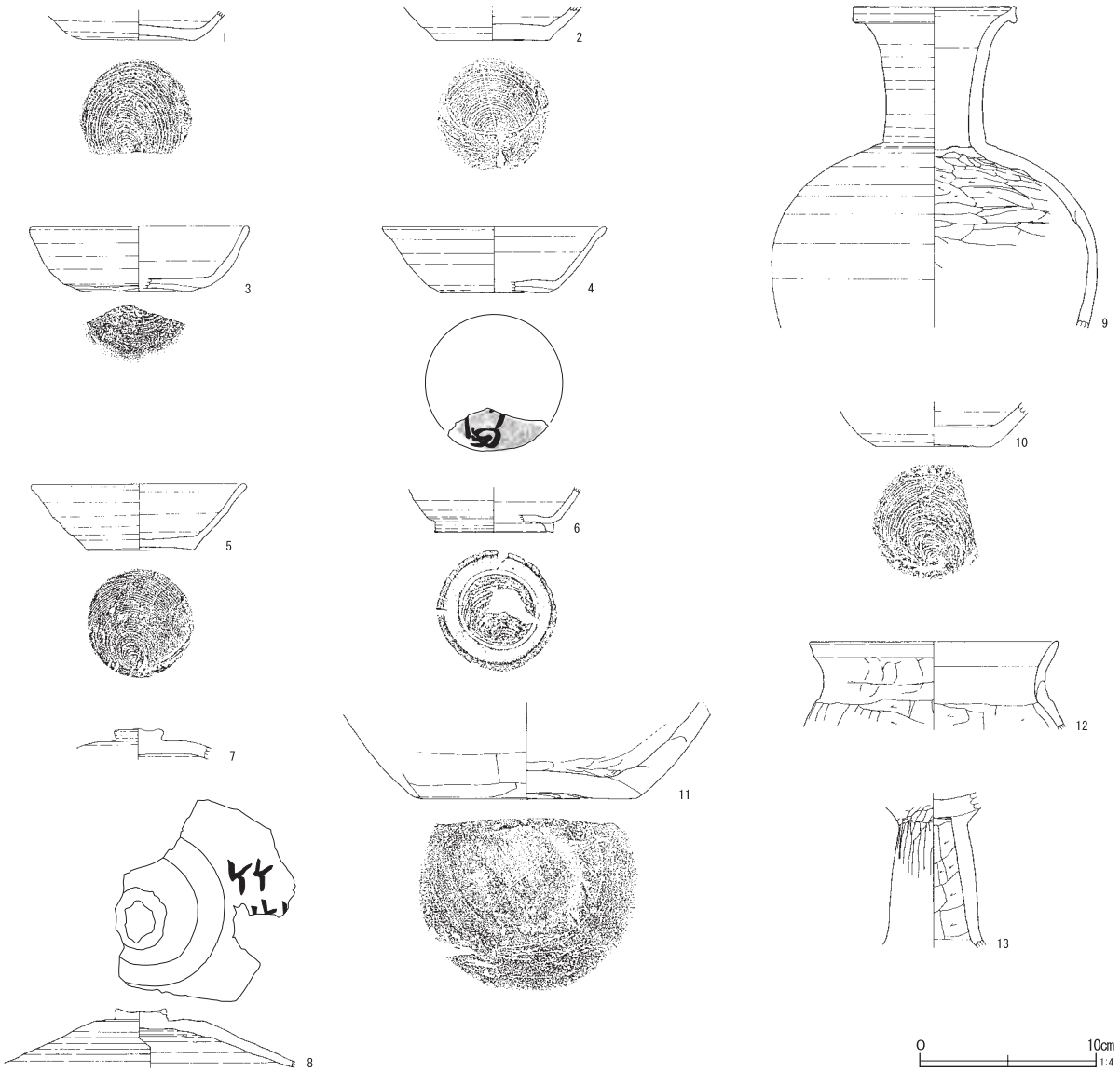
第５表　グリッド出土遺物（1）観察表

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎　　土	焼成	色　調	出土遺構	備　　考
1	須恵器	坏		(0.8)	(6.4)	30	砂粒　白粒　赤粒　針	良好	灰	Ｇ９	ロクロ左回転
2	須恵器	坏		(1.4)	(6.5)	40	砂粒　白粒　針	良好	灰	Ｇ９	ロクロ右回転
3	須恵器	坏		(1.7)	6.4	70	砂粒　赤粒　針	良好	灰白	Ｇ９	ロクロ右回転
4	須恵器	坏		(2.1)	5.2	60	砂粒　黒粒　針	良好	灰白	Ｇ８	ロクロ左回転
5	須恵器	坏		(1.6)	(6.8)	30	砂粒　白粒　黒粒　針	良好	灰白	Ｇ９	ロクロ左回転
6	須恵器	高台付坏		(1.5)	6.8	80	砂粒　白粒　黒粒　針	良好	灰	Ｇ９	ロクロ右回転
7	須恵器	高台付坏	15.8	7.0	6.9	80	砂粒	良好	灰白	Ｇ９	ロクロ右回転か
8	須恵器	坏	12.0	4.0	6.6	80	砂粒　石英？　針	良好	灰	Ｇ８	ロクロ右回転
9	須恵器	坏	12.2	3.9	6.0	80	砂粒　赤粒　針	良好	灰白	Ｇ８	ロクロ右回転
10	須恵器	蓋		(2.0)	2.8	70	砂粒　石英　黒粒	良好	灰白	Ｇ９	ロクロ右回転
11	須恵器	蓋	(16.0)	(1.9)		20	砂粒　白粒　針	良好	灰白	Ｇ８	
12	土師器	甕	(18.0)	(6.2)		20	砂粒　白粒　赤粒　角閃石	良好	にぶい赤褐	Ｇ８	
13	土製品	土錘	幅	長	孔						
			4.0	(9.7)	1.5	90	砂粒	良好	灰	Ｇ９	須恵器

9　グリッド出土遺物（第21、22図）

遺物が出土したグリッドの範囲は、Ｃ－２グリッドが北端部で離れているが、大部分はＦ－７～８、Ｇ－８～10、Ｈ－９グリッド出土で、土器集中地点３の周辺部から第４～５号溝跡までの範囲に収まっている。

Ｇ－８～10グリッド出土遺物（第21図）は、須恵器坏が多い。底面は回転糸切り離しで、2、９は周縁部の一部が篦削り調整される。９は口唇部が肥厚するが、一部屈曲が顕著で、稜線状をなす。10の蓋は天井部が削り出される。末野産である。12は土師器甕形土器で、口縁部の屈曲が顕著ではなく、湾曲



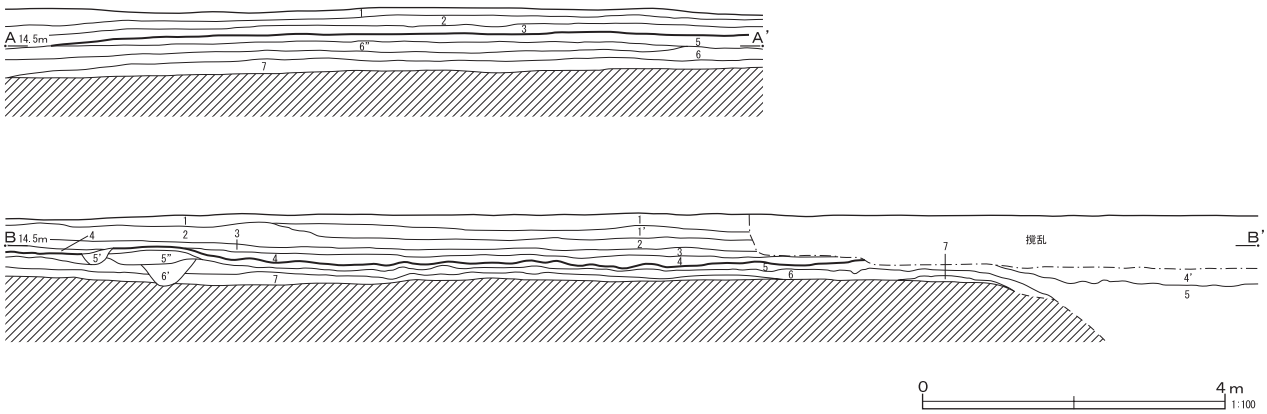
第22図　グリッド出土遺物（2）

第６表　グリッド出土遺物（2）観察表

番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎　　土	焼成	色　調	出土遺構	備　　考
1	須恵器	坏		(1.7)	6.2	60	砂粒　石英　角閃石　針	良好	灰白	Ｆ７	ロクロ右回転
2	須恵器	坏		(2.0)	6.4	60	砂粒　白粒　針	良好	灰白	Ｍ９	ロクロ右回転
3	須恵器	坏	(12.4)	(3.7)	(7.1)	30	砂粒　白粒　赤粒　針	良好	灰オリーブ	Ｃ２	No.4　ロクロ左回転
4	須恵器	坏	(12.6)	(3.7)	(6.4)	30	砂粒　白粒　黒粒　針	良好	灰白	Ｆ７	墨書　ロクロ右回転
5	須恵器	坏	12.2	3.7	6.1	70	砂粒　白粒　石英　片岩	良好	灰	Ｆ７	ロクロ右回転
6	須恵器	高台付坏		(3.0)	(6.5)	60	砂粒　白粒　黒粒　針	良好	灰	ＳＤ5　Ｆ7	ロクロ左回転
7	須恵器	蓋		(1.6)	2.8	60	砂粒　白粒　針	良好	灰白	Ｇ10	ロクロ右回転
8	須恵器	蓋		(3.2)		60	砂粒　黒粒　角閃石　針	良好	灰白	ＳＤ4　Ｆ7	
9	須恵器	長頸瓶	9.0	(18.2)		70	砂粒　白粒	良好	灰	Ｆ７	ロクロ右回転
10	須恵器	壺底部		(2.5)	(6.6)	70	砂粒　針	良好	灰白	Ｆ８	ロクロ左回転
11	須恵器	甕底部		(5.5)	(12.6)	60	砂粒　白粒　石英	良好	灰白	Ｆ８	ロクロ右回転
12	土師器	台付甕	(14.0)	(5.0)		30	砂粒　角閃石	良好	明赤褐	Ｇ９	
13	土師器	高坏		(8.8)		80	砂粒　白粒　赤粒　石英　角閃石	良好	にぶい黄橙	Ｆ７	

して胴部に移行する。外面胴部と頸部の境は、横方向の篦削りによって造出され、明確な段をなしていない。第22図12台付甕形土器と共に、「く」字状から「コ」字状口縁への移行段階と考えられる。13の土錘は、端部が平坦に作出され、還元焔焼成。

Ｆ－７～８グリッド出土遺物（第22図）は、６が第



1　緑灰褐色土　粘粘土　現代耕作土
1'　黄灰褐色土　粘粘土　鉄分斑(少)　マンガン結核(少)　耕作土
2　黄灰褐色土　粘粘土　浅間A火山灰含む(近世耕作土)
3　灰褐色土土　粘粘土　鉄分斑沈着　マンガン結核(少)(中世耕作土？)
4　暗灰褐色土　粘粘土　鉄分斑沈着　マンガン結核底面　少砂礫(微)
　　遺物含む　平安以降水田耕作土
4'　暗灰色土　粘粘土　鉄分斑(微)　砂粒少　(溝or小河川フク土最上層)
5　黒色土　粘粘土　湿地性堆積土　ASB(浅間B火山灰)を微量含む
5'　灰褐色土　粘粘土　溝フク土
5"　灰褐色土　粘粘土　黒色土を斑状に含む　しまり良好　畦畔土壌
6　灰褐色土　粘粘土　鉄分沈着(ラミナ状堆積)　水田耕作土か？
6'　暗灰色土　粘粘土　黒色の腐蝕土を含む　溝フク土
6"　暗灰褐色土　粘質土　白色微粒子(少)　鉄分斑(微)　微少な砂粒含む
7　灰褐色土　粘粘土　酸化鉄斑(多)　水田耕作土or水田床面

第23図　Ｄ区断面図

５号溝跡、８が第４号溝跡出土の小破片と接合し、各溝跡に伴う可能性が高い。６はやや小形の高台付坏である。８は摘み周縁部が剥落し、天井部周縁はヘラ削りされる。外面墨書は、「竹」は明瞭であるが、下は「田」か「甲」或いは「村」等が考えられる。１、２は須恵器坏底部で、回転糸切離しである。４は墨書土器で、一字か二字か判読は困難である。二字とみると、下は潰れてはいるが「田」か「甲」。上は「竹」の下端部の可能性があり、「竹」「甲」となるか。回転糸切離しである。５は体部が直線的に立ち上がる須恵器坏で、底部回転糸切離し後、部分的にヘラ調整される。７は須恵器蓋で、摘み周辺部に糸切り痕を残し周辺部はヘラ削りされる。９は長頸瓶で体部が丸く、頸部内面に指頭痕が明瞭に残る。10、11は須恵器壺、甕形土器の底部で、11は体部下端から底部周縁部にわたって、ヘラ削りされ、中心部は一定方向の指頭ナデが施される。内面は下端部に明瞭な輪積痕が残る。13は古墳時代前期の高坏形土器で、外面ヘラ磨きで、内面ヘラ削りされるが、摩滅顕著である。その他須恵器大甕口縁部破片が、２点出土している。いずれも胎土中に白色針状物質を含んでおり、南比企産である。

10　Ｄ区の遺構（第６、23図）

Ｄ区で確認された遺構は、溝跡７条、畦畔状遺構１条、旧河道２カ所、谷地形１カ所である。溝跡７条のうち１条（ＳＤ７）については、畦畔状遺構に伴う溝跡である。以下に一覧表として示す。

第７表　Ｄ区　遺構一覧表

遺構番号	長さ	幅	走行方向	グリッド
1	3.04	0.20	Ｎ－91°－Ｗ	Ｑ－20
2	3.30	0.30	Ｎ－92°－Ｗ	Ｑ－20
3	3.50	0.30	Ｎ－89°－Ｗ	Ｑ－20
4	3.90	0.50	Ｎ－84°－Ｗ	Ｑ～Ｒ－21
5	3.50	0.40	Ｎ－91°－Ｗ	Ｓ～Ｔ－23
6	4.00	0.50	Ｎ－４°－Ｅ	Ｖ－26～27
7	3.30	0.30	Ｎ－２°－Ｗ	Ｙ－31

V　結語

今回の調査で検出された遺構は、土壙４基、井戸跡２基、溝跡10条、土器集中地点３箇所、杭列状遺構１箇所、河川跡２箇所、畦畔状遺構、堤状盛土１箇所であった。

以下では、主な出土遺物と遺構について、若干のまとめを行うことにする。

１　出土遺物について

奈良時代の土師器坏形土器も１点出土しているが、本遺跡出土遺物のうち主体をなすものは、平安時代の土師器、須恵器、土製品類である。

古墳時代の遺物は極く少量で、鬼高式期に属すると考えられる高坏破片が２点出土している。

その他、近世の陶磁器類が出土している。

平安時代の遺物は、Ｂ区の土器集中地点とその周辺部を中心に出土し、おおむね調査区北端部と南端部の２カ所に分布している。

北端部は、土器集中地点１と２及びその周辺。南端部は土器集中地点３から第４、５号溝跡にいたる範囲である。

南端部の土器集中については、吉見町教育委員会による調査区（遺構外第１区）から連続するものと把握でき、どちらも９世紀前半～中頃の土師器、須恵器が出土している。

吉見町教委調査区では、取手付きの須恵器高台付坏、須恵器坏、蓋、土師器甕が出土している。

本調査区では須恵器坏、蓋、土師器甕等の他、土製支脚が出土し、焼土の分布も考慮すると、或いは竪穴住居跡があった可能性もある。

北端部の土器集中地点１と２では、土師器甕形土器、乃至台付甕形土器の胴部破片が多量に出土したが、全体を復元できるものが無かった。僅かに底部、脚台部接合部分が実測できたのみである。底径がやや大きめのものと、小さいものがあり、８～９世紀の薄甕底部である。

土錘はピット４からの出土である。吉見町教委出土のものは紡錘形に近いものが多いが、本例は胴部の張りが比較的少ない。その他須恵器甕が出土しているが実測には至らなかった。

土師器甕形土器は、いわゆる「コ」字状口縁の甕が大部分である。口唇部は丸く収まるものが多く、端部の立ち上がり、外面の平坦面の作出或いは沈線の描出等未発達で、直立する口縁部は横ナデ後の指頭による押圧、また頸部の段も不明瞭な段階である。

須恵器坏は、底径／口径比が１／２ないし僅かに底径が大きいもので、大半が回転糸切り後未調整である。また底部周辺部がヘラ削りされるものも少量存在する。９世紀前半～中頃に属するものである。

須恵器の産地については、大部分が白色針状物質を含む南比企産のものである。

墨書土器は２点出土している。

須恵器蓋は、体部外面に墨書が残るもので、２字確認でき、「竹」ともう一字は判読が難しい。上側の横一文字が不鮮明で憶測の域を出ないが、「田」ないし「甲」或いは「村」の可能性がある。

須恵器坏は、底部外面に墨書が残るもので、蓋と同じく２字確認できる。下の墨影は崩れているが、「甲」と判読できる。上は大部分欠失しているため判読困難であるが、両側の縦一文字と、中央やや上に残る点状の墨痕は、「竹」の下半部と見ることも出来る。

須恵器蓋、坏ともに同一文字ということになるが、書体がやや異なっており問題は残る。しかしながら「竹甲」ということになると、『和名抄』に記載された横見郡を構成する三郷のひとつ「高生」郷に通じることとなる。古代郡郷制の解明に、貴重な資料を提供するものである。

２　検出遺構について

Ａ区は市野川旧河道内に当たっていたため、遺構は検出されなかった。

Ｂ区は、北端部で旧河道跡が検出され、旧河道埋

没土中から、土器集中地点が２カ所検出された。遺構構築の順は、市野川旧河川、谷地形→堤状盛土、ＳＤ１→旧河川、谷地形、堤状盛土埋没→土器集中地点１，２である。土器の集中範囲は、一部堤状盛土の上に及んでおり、９世紀前半～中頃の段階で旧河道、谷地形、盛土等はすでに埋っていたと判断される。盛土中から土師器薄甕破片が出土しており、盛土構築時期は、土器集中地点と差程変わらない時期と考えられる。

土器集中地点２は、ピットが略楕円形状に配置されるが、深さは20㎝以内でいずれも浅いものである。遺物集中地点を中心に、Ｐ２、Ｐ10、Ｐ５とＰ８、Ｐ９によって略方形の建物跡が想定され、西側を除いた南、北、東方向に疎らに側柱がつく建物跡が考えられる。１×２間の掘立柱建物跡は、吉見町教委調査区で２棟検出されているが、主軸方向がやや異なっている。出土遺物は甕形土器破片で、集中地点１では土錘が出土している。集中地点２では細片が多く実測できるものはなかった。

杭列状遺構としたものは、Ｅ－５～７グリッドに位置し、概ね南北方向に約140ｍにわたって配列されている。またＳＤ４，５と併行するような位置関係にある。出土遺物は須恵器坏１点であるが、Ｐ11から出土した。溝跡とほぼ同一時期である。

南端部の土器集中地点３は、前述のとおり須恵器坏、蓋、土師器甕等の他、土製支脚が出土し、焼土の分布もあり、竪穴住居跡であった可能性がある。吉見町教育委員会による調査では、対応する位置から竪穴住居跡１軒と掘立柱建物跡１棟が検出され、多量の９世紀前半～中頃の土師器、須恵器が出土している。

溝跡は10条検出され、Ｂ区の北側から中央部にかけて集中している。今回調査のＳＤ２、３並びにＳＤ４、５は、吉見町教育委員会による調査のＳＤ４、８に、またＳＤ１に連続するものと考えられる。

東西方向のＳＤ２と３は、やや位置がずれるが、屈曲して繋がるものとみられる。

南北方向のＳＤ４と５も、僅かに屈曲して繋がり、ＳＤ４は吉見町教育委員会調査のＳＤ１東側の掘り直し部分に対応すると考えられる。吉見町教育委員会調査のＳＤ15とＳＤ20は、連続する溝跡と判断されているが、走行と屈曲の状態をみるとほぼ並行する溝跡と見なされる。報告書ではＳＤ15、20以東は、水田域と考えられている。

その他東西方向の溝跡が４条（ＳＤ７～10）、南北方向の屈曲する溝跡（ＳＤ６）が１条検出された。今回の調査では遺物が出土していないため溝跡の時期は不明であるが、吉見町教育委員会調査区では多くの溝跡が検出され、多量の出土遺物から所属時期は９世紀前半～中頃と把握されている。

調査区南東のＤ区では、旧河川跡、谷地形、畦畔状遺構、水田区画溝が検出されたが、台風による度重なる冠水によって、遺構の存在を確認したに止まった。

旧河川跡、谷地形については試掘調査により、表土下３ｍで古墳時代前期の遺物包含層が確認されている。

溝跡７条と畦畔状遺構１条の所属時期は、出土遺物は極く少量で、実測できるものはないが、断面観察と併せて９世紀代とみなされるものである。

走行は南北方向が１条あるが、他は全て東西方向となっている。また北端部の溝跡は３条纏まり、南端部では、東西に走行する畦畔状遺構に伴う溝跡である。

近世の遺構は、井戸跡２基である。台風による度重なる冠水により完掘できなかった。

その他時期不明の土壙が、Ｂ区で２基、Ｃ区で２基検出された。

以上検出された遺構は、土壙、井戸跡、溝跡、堤状盛土、杭列状遺構、土器集中地点、畦畔状遺構、河川跡等で、平安時代（９世紀代）の遺構が大部分を占める。吉見町教育委員会調査分も含めて、奈良・平安時代の遺構群は、遺跡名が示すように古代条里制に関連するものと考えられる。

D区では東西に走行する畦畔状遺構と溝跡、またB区では吉見町教育委員会調査区にまたがる、南北に走行する溝跡２条が検出された。これらの溝跡は、必ずしも直線状となっておらず、条里軸線を推定することは困難である。また109ｍ前後の坪区画にのっているものではない。町教委報告でも条里型地割の復元には慎重で、「条里地割？」とされている。

本遺跡周辺部の条里制については、既に研究蓄積があり、原島、金井塚両氏によって条里型地割の存在が指摘されている（原島1978、金井塚1978）。

原島氏は、市野川の東西両岸を含めた本遺跡周辺部を「都幾川北岸の条里」とし、南北軸線が東にややふれる条里を復元され、「この条里の坪並は比企郡型を示すので、吉見町の南吉見地区は古代においては比企郡に属していたとみるべきであろう」（原島1978）とされた。

最近調査された古代道路推定ラインの走行方向は、更に東側にふれており（弓2002）、復元された条里坪並軸方向と一致していない。

遺跡周辺に推定される条里型地割の施工時期が、どこまで遡るのか確証はないが、荒川流域では「施行年代は７世紀から９世紀ころにかけてと考えられ」、「秩父郡、比企郡、入間郡などでは、同一規範のレイアウトで、郡又は国で行ったということはない」（埼玉県1980）とされている。

現行条里と古代条里の関係が、発掘調査により明らかにされた例が最近増加している。

本庄市今井条里遺跡（岩田1990）、岡部町岡部条里遺跡（宮本1998、中村1999）、熊谷市北島遺跡（鈴木・富田2005）等の調査例によると、坪区画に伴う溝跡は直線的で、大溝乃至数条の溝跡で区画されることが多い。坪区画内部は水田で、基本的に溝跡の検出は少ない。

今井条里遺跡では、周辺部分の集落域（地神遺跡、塔頭遺跡）で屈曲、或いは斜行する溝跡が多数検出されている（岩瀬1998）。また同遺跡では７世紀～９世紀の間でも、時期により方位がずれることが明らかになっている。（岩田1990）

以上のような調査例をみると、遺跡全体の中での遺構群の位置関係は、遺跡範囲の周縁部に存在していること、また中央部には水田跡が想定されていること（太田2005）から、今井条里遺跡に近いと考えられる。さらに出土遺物、特に墨書土器の存在等を考慮すると、官衙的な存在も想定できる。大溝や併行する複数の溝跡（D区のものは可能性がある）は、検出されなかったが、太田氏の推定するように、条里型地割に伴う遺構群の可能性が高いと考えられる。今後周辺部の調査によって、大溝等が検出され条里型地割の存在がより明確化し、その実態が明らかになって行くと思われる。

引用・参考文献

赤熊浩一・岡本健一　2004　『下田町遺跡Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第296集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

赤熊浩一・岡本健一・松岡有希子　2005　『下田町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第301集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岩瀬　譲　1998　『地神／塔頭』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岩田明広　1998　『今井条里遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第192集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

太田賢一　1998　「吉見町三ノ耕地遺跡の調査」　『第31回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他

太田賢一　2000　「宝篋印塔修理工事と出土遺物－吉見町金蔵院宝篋印塔保存修理」『情報20』　埼玉考古学会

太田賢一　2001　「吉見町伝大串次郎重親塔保存修理工事と出土遺物」『第33回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他

太田賢一　2002　「西吉見古代道路跡－西吉見条里Ⅱ遺跡発掘調査概報」『原始・古代の吉見１』　吉見町教育委員会

太田賢一　2003　『下遺跡－集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』　吉見町遺跡調査会発掘調査報告書　吉見町教育委員会

太田賢一　2005 a　『西吉見条里遺跡－第１分冊－－県営ほ場整備事業西吉見南部地区に伴う発掘調査報告書－』
吉見町埋蔵文化財調査報告書　第２集　吉見町教育委員会
太田賢一　2005 b　『町内遺跡Ⅰ－武州松山城跡第一次・第二次発掘調査報告書－』
吉見町埋蔵文化財調査報告書　第３集　吉見町教育委員会
大矢雅彦 他　1996　『荒川流域地形分類図（その２）』　建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
貝塚爽平 他　2000　『日本の地形４　関東・伊豆小笠原』　東京大学出版会
金井塚良一　1969　『埼玉県比企郡吉見村黒岩横穴群』　吉見村教育委員会
金井塚良一　1978　「原始古代の吉見」『吉見町史　上巻』　吉見町町史編さん委員会
君島勝秀 1999『外東／神田天神後／大久保条里』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第206集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
黒坂禎二 2002『池上／諏訪木』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第283集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼 玉 県　1982　『新編　埼玉県史　資料編２原始・古代　弥生・古墳』
埼 玉 県　1987 a「第４節　条里遺跡と荒川」『荒川　人文Ⅰ－荒川総合調査報告書２』　埼玉県
埼 玉 県　1987 b『新編　埼玉県史　通史編１』
埼玉県教育委員会編　1987　『埼玉の館城跡』　国書刊行会
埼玉県教育委員会　1988　『埼玉の中世城館跡』
埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課　比企地区文化財担当者研究協議会　1994　『平成５年度後期市町村文化財担当者会議資料　比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
埼玉県県史編さん室　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』
塩野　博　2004　『埼玉の古墳〔比企・秩父〕』　さいたま出版会
鈴木孝之　1991　『代正寺・大西』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第110集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫・鈴木孝之　2005　『北島遺跡ⅩⅡ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第304集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中村倉司　1999　『岡部条里／戸森前』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
原島礼二　1978　「東松山市と周辺の古代－条里遺構調査を基にして」『市史編さん調査報告』　第13集　東松山市
藤井尚夫　1981　「松山城」『東松山市史 資料編第一巻』　原始古代・中世　遺跡・遺構・遺物編　東松山市
宮本直樹 他　1998　『岡部条里遺跡』　埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書 第３集　岡部町教育委員会
山本　禎　1991　『山王裏・中原遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第98集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山本　禎・西井幸雄　1997　『山王裏／上川入／西浦／野本氏館跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第184集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
弓　明義　1995　「吉見町大行山遺跡の調査」　『第27回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
弓　明義　1997　「古墳時代前期の前方後方墳墓の調査について～吉見町三ノ耕地遺跡第１次発掘調査～」『情報18』埼玉考古学会
弓　明義　1997　「吉見町三ノ耕地遺跡の発掘調査」『第30回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
弓　明義　2002 a「吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の調査」『第35回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉考古学会他
弓　明義　2002 b「吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の古代道路跡」『埼玉考古　別冊６』
埼玉考古学会シンポジウム坂東の古代官衙と人々の交流　埼玉考古学会他
弓　明義　2002 c『二十二耕地遺跡－埼玉県営ほ場整備事業西吉見南部地区に伴う発掘調査報告書－』
吉見町埋蔵文化財調査報告書　第１集　吉見町教育委員会
弓　明義　2003　「吉見町和名埴輪窯跡群の調査」　『情報24』　埼玉考古学会